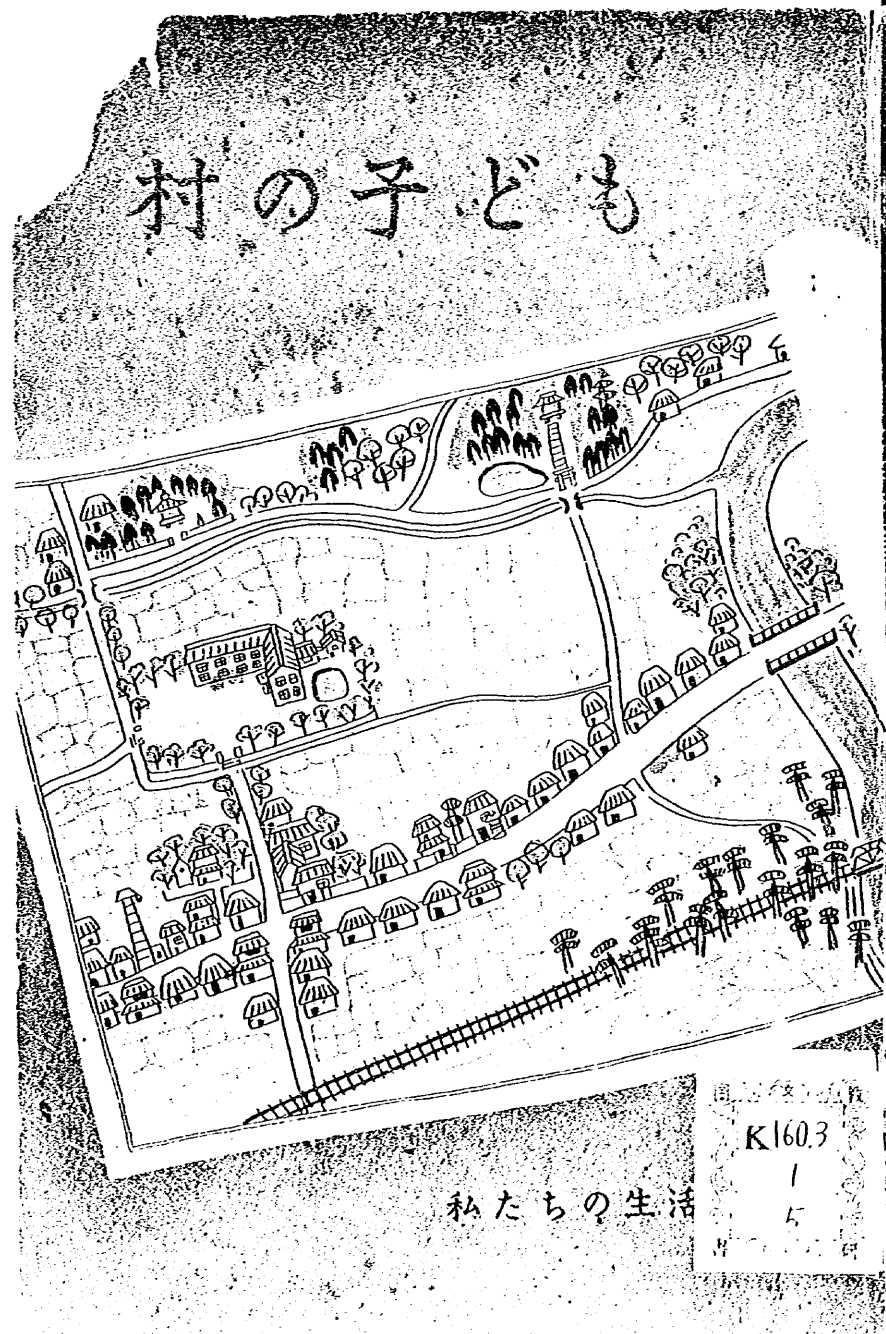




K160.3

1

5

いはばしる

たるみの上の

さわらびの

もえいつる春に

なりにけるかも

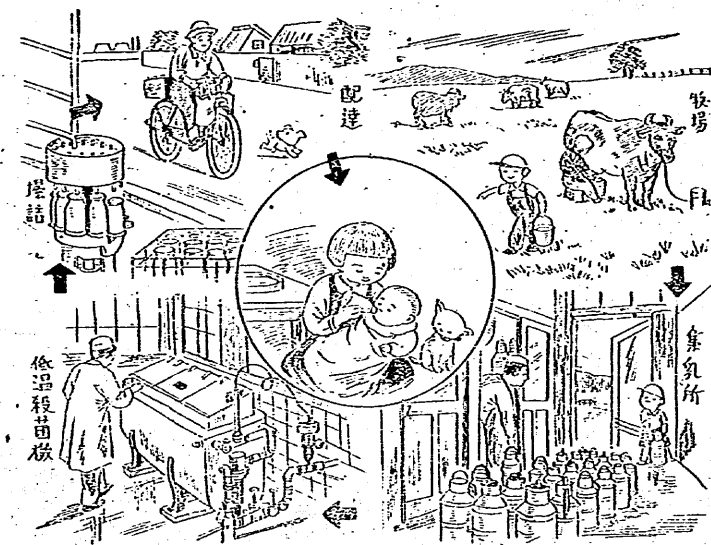
一、五年になつて

三郎君もいよいよ五年生になりました。急ににいさんになつたような氣がして得意です。教室も二階になり、窓からは運動場で下の学年の子どもたちが遊んでいるのがよく見えます。しかし三郎君の得意なわけはほかにもあります。それはこんどから、おとうさんのかわりに、毎朝牛乳をとり町の集乳所までもつていくようになったことです。五時半に起きて、床をかたづけ、顔を洗い身じたくをして、牛小屋にいくと、おとうさんが、牛乳の輸送かんを用意しておいてくださいます。三郎君は、それを自轉車についで、すぐ出発するのです。家からとなり町の集乳所までは、およそ三キロあります。だから六時半までにもつていくのにはおおいそぎです。けれども、このごろのように氣候のよい朝、縣道を自轉車をとばしていくのはゆかいです。ことに松崎橋まではくんだりですからいい氣持です。

三郎君が口笛を吹きながら走っていくころは、もう春の日はかなり高くあがつていま

もくじ

一、五年になつて	一
二、委員 会	八
三、さまざまの協力	一七
田うえ(第二はん)	一七
田うえ時(第三ばん)	一九
大昔の狩(第五はん)	二五
昔の漁業、今の漁業(先生)	三三
漁業部落の見学(第四ばん)	四四
まぐろ延縄の話(第四ばん)	四四
四、誕生 日	五三
五、夏休みの計画	七〇
六、夕御飯のあと	七六
七、町からの手紙	八五
八、新聞やラジオのなかつた時代	一一八
学校へいく路	一二三
(附) 教師及び父兄の方へ	



す。右がわの家々のかげになつて
まつ林のむこうから、太平洋の波の音
がきこえてきます。あたりの麦畑から
は、しきりにびばりのさえずる声がし
ます。たんぼでは一寸そらまめがいつ
ばい実をつけています。西の方の山々
にはかすみがかかっています。鎮守の
森をはずれると急に景色がひらけて、
右手に海が見えはじめます。そしてそ
のむこうに、となり町の家々があらわ
れてきます。松崎橋を渡ると、道は少
しのぼりになります。これまで三郎君
は、ここからのぼりになるということ

をあまり感じていませんでしたが、重い輸送かんを自轉車ではこんでみて、はじめては
つきりとそれがわかりました。橋から集乳所までは、約一キロですが、いきにはどうし
ても汗でびつしよりになります。集乳所につくと、組合の人が「御苦労さん」といつて
輸送かんを受け取ってくれます。三郎君は、この無口な組合のおじさんがなんとなくす
きで、御苦労さんといわれるとうれしくなりました。

歸りはたいそうらくです。橋の所まではすぐきてしまします。橋の所からは旧道を通
ります。道は少しわるいけれどもだいぶ近道になります。歸りにはきまつて、橋のそこ
ろで上の山ののいさんが銀行にいくのにあいます。そして鎮守さまの裏手あたりでは、
松山先生ともよくお目にかかります。松山先生は、一昨年となり町の学校に御榮轉にな
つたのです。上の山ののいさんも松山先生も、三郎君を見るとにこにこして、「よう」
と声をおかけになります。

家に歸ると、たいてい七時少しすぎになります。からの輸送かんを牛小屋へ置き、自
轉車を土間に入れ、井戸ばたでからだをふき、手足を洗つてあがると、もう朝飯のした



くができています。おかあさんは、いつでもコップに牛乳をいれておいてくださいます。三郎君は、このしぼりたての牛乳をのむのが楽しみです。往復六キロの自転車のりのあとでは、たいていおいしいのです。

朝食をすませて、かばんにいられていくものをもう一度しらべているころには、もうおとなりの弘君がさそいにきます。弘君は三年生です。学校へは、近くのものみんなさそいあわせて

いくのです。途中で鉄道のふみきりがあるので、三郎君や近所のくに子さんは、とくに下の学年の人たちを残さないようにつれていくことにしています。

学校は三郎君の家から約一キロ、村役場のとなりで縣道に面しています。三郎君もくに子さんも学級の新聞係の委員ですから、教室にはいると、すぐ掲示板をしらべたり、投書箱をのぞいたりして、それから道具をおいて運動場に出てみんなと遊びます。

こん学期のはじめ、先生からのお話によつて、三郎君たちの組は次のようなことをきめました。

一、人々の生活のしかたを進んでしらべよう。

二、自分たちの生活を少しでもよくするためになんでもしよう。

これが、学級の標語になつて、教室の前の壁にかかげられています。字は級長の山本君が書いたのです。学級新聞も、この標語を実行する方法の一つとして、学級自治会できまつたことなのです。学級新聞の委員は、三郎君やくに子さんのほかに、上田進君、金子すみ子さん、上田はる子さんの三人がいます。毎週木曜日までに、学級のものがみん

なに見せたいと思うことや、みんなが知っておいた方がよいと思うことを、ニュースとして紙に書いて、投書箱に入れておくことになっています。そのニュースには、なるべく絵をつけようときめたのです。ニュースのほかに、歌や俳句や詩やなどや問題などを出す人もいます。金曜日の自由研究の時間に委員たちが集まって、これらを壁新聞として掲示板にはり出すもの、とうしゃばんにするもの、口でみんなに知らせるものの三つに分けるのです。はじめはなかなかうまくいきませんでしたが、このごろはみんなむちゆうです。委員は金曜日が待ちきれず、木曜日の放課後、すみ子さんの家に集まってえりわけをし、金曜日には壁新聞をつくったり、とうしゃばんの原紙を切ったりするようにすることが多いのです。きょうもたぶん、すみ子さんの家で委員会をすることになるでしょう。

次のような事を考えてみたり、してみたらどうでしょう。

- 1、朝学校にくるまでにすることをしらべて話しあってみること。
- 2、集乳所に集められた牛乳は、どこへいくかをしらべてみることに。
- 3、近道のつぎのよいところとわるいところとを考えてみることに。
- 4、きまった時刻にきまった道路を通る人は、どんな人たちがしらべてみることに。
- 5、登校の途中の安全に関する注意を書きあげてみることに。
- 6、一つの道路を選んで、ある場所の交通量をしらべることに。
- 7、学級の標語についてそのよしあしを考えてみることに。
- 8、自分の研究しようと思っていることを表にすることに。
- 9、学級の人たちの手つだいのありさまをしらべることに。
- 10、病気の予防法をしらべることに。
- 11、学級新聞を発行することに。

二、委員 会

すみ子さんの家は進君の家のはなれです。おとうさんは東京の病院にお勤めで、一週間に一、二回お歸りになります。すみ子さんが一年のとき、この土地に疎開してこられたのです。ふだんは、二年の正雄さんとおかあさんと三人でくらしていられます。土地の人たちも、病人ができると、すみ子さんのおとうさんのお世話になるので、東京にお歸りにならないといいな、などといっています。

荷物はほとんど進君の家の土蔵にしまつてあつて、八疊と六疊の二間に台所ですが、たいへんゆきとどいた氣持のよい生活をしていらつしやいます。木曜日は、たいいおとうさんがいらつしやらないので、新聞の委員たちがおじやまするのです。八疊の座敷のえんがわよりに、テーブルを出して、みんなで相談するのです。

テーブルの上には、みんなの原稿がのつています。五人の委員は、めいめい、それをとつて、楽しそうに読んでいきます。

進「石井君のところでは、もう苗代をつくるそうだ。」

はる子「まあ、ずいぶん早い。」

進「きつと村でもいちばんだろう。」

すみ子「どんなことが書いてあつて……。」

進「うん、読むよ。きのうおとうさんが種もみをえらびました。かめに水を入れ、塩をまぜて、種もみを入れ、よくかきまわして、浮いてくるのをすくいとつて、沈んだ種もみだけをえらぶのです。塩をけんやくするために、二斗もある種もみを、何回にも分けてするのでたいへんでした。ぼくはえらんだ種もみを、ま水で洗つて、塩けをのぞくのを、手つだいました。おとうさんは俵に入れて、裏の川につけました。苗代田は、もうすきおこしがすんで、水がはつてあります。二、三日ちゆうにしろかきをして、種をまこうといっています。ぼくが手つだつてえらんだ種もみですから、じょうぶな苗に育ってくればよいと思っています。」

種もみ、種もみ、

うんとすえ。

流れの水をうんとすえ。

みんなそろって

つよい苗になるんだぞ。」

すみ子「まあ、おもしろい、石井さん、ずいぶん、りきんでるわねえ。」

三郎「石井君はきつと、苗代のニュースをつづけるよ。」

進「みんなも、きょうそうで書くよ。」

くに子「新聞が、たんぼの話ばかりになってしまいわ。」

はる子「そんなことはないわ。蚕かいこのこともあるし、遠足のこともあるし……。」

進「そうさ、いろんなことがありすぎるくらいだ。」

くに子「ほんとにそうね。だけど、新聞も、たんぼのことばかりのせるのも、ときには

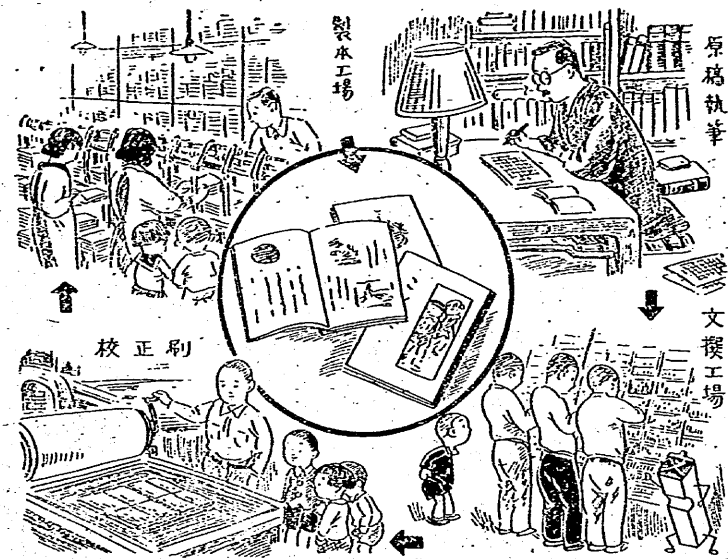
おもしろくないかしら。」

三郎「たんぼ新聞、たんぼ新聞つくばろうかな。ハッハッハ。」

すみ子「でもそれでは、新聞らしくなくなってしまうでしょう。」

くに子「そうね……。」

ちょうどすみ子さんのおかあさんがお茶をもってきてくださいました。これは進さんのおかあさんからよといって、どんぶりにそらまめの塩うでを山もりくださいました。すみさんは、テーブルの上を片づけて、みんなにすすめました。お茶をいただきながら、みんなは原稿を見たりしていますが、三郎君は、さっきから何か考えこんでいるようです。時々思いついたようにお茶をのんだり、そらまめをたべたりしますが、しきりに頭をひねっています。しかしほかの四人は、自分の仕事にむちゅうで気がつきません。「ただいま。」と元氣な声が出て、正雄君が帰ってきました。おかあさんが、「手を洗いなさい。」といつていらつしやいます。となりのへやでおやつをいただいた正雄君は、三郎君たちのところへきて、「ぼくにも見せて。」とねだります。すみさんは、「ちらかしてはだめよ。」といいながら、絵の多いのを五、六枚かしてあげました。正雄君もなれているとみえて、おとなしく、絵を見たり、字をひろい読みしたりしています。



三郎「進君、ぼく、こういうことを考えたんだけど、どうだろう。」

進君も、くに子さんも、みな、三郎君の方を見ました。

三郎「さっきのくに子さんの考えね、あれはおもしろいと思うんだ。みんなが、たんぼのことをたくさん書いてくれるときには、それをだんだんひとまとめにして、本にしていかならんするんだ。村のたんぼとかなんとかいう名まえをつけてね。」

進「つづり方のかいらんみたいに？」

三郎「うん、そうすれば、学級できめ

た、人々の生活のしかたをもっとくわしくしらべるといふこと、みんなで作るといふこと、おとも子ども、馬や牛までみんなで作るんだらう。みんなのお手つだいだつてずいぶんあるしね。」

くに子「そうよ。三郎さん、うまいわね。わたしも、なにかそんなような気がしたんだけど、三郎さんがたんぼ新聞、たんぼ新聞なんていうから、おかしくなつたんだわ。」

進「ハッハハ。でもいい考えがでてよかったじゃないか。みんなや先生に相談してみようよ。」

はる子「口絵を入れたり、きれいな表紙をつけたりしましょうよ。」
すみ子「みんなきつとさんせいよ。山本さんなんか、だいさんせいなんて、飛びあがるわよ。だけでもう少し、内容を考えておいたほうがよくないかしら。ふつうのかいらんと同じになつてしまわないように、みんなの書いたのが、うまくつづいていかなく

ちゃだめでしょう。」

三郎「そうだね、みんなも、きつとそれをきくね。ぼくたちで計画をつくってみようよ。」

五人はしばらく話しあっていました。まもなくこんな案ができました。

本の名 たんぼでの協力
締切 農はん休みまで
内容 はしがき
もくろく

口 絵

苗 代 とり入れのころ

田 うえ時 供 出

たんぼの水 ぼくたちの仕事のしらん表

田の草とり

二百十日

仕事はわきみちにそれたまま、だいぶおそくなつてしまいました。三郎君たちは、おいそぎで、壁にはるものと、するものとをよりわけると、テーブルをかたづけ、すみ子さんのおかあさんにごあいさつをして散会しました。三郎君とくにすみ子は、帰りに

もこれからつくる本のことを話しあっていました。

新聞の委員たちの考えは、そのつぎの学級自治会のために、みんなで、いろいろなおしだり、つけ加えたりしましたので、こんなふうにかわりました。

本の名 さまざまの協力

締切 六 月 末

内容と分たん

表 紙……美術はん

はしがき……新聞はん

もくろく……新聞はん

口 絵……(けんしょう)

田 うえ時……第二ばん

養 蚕……………第六ばん
茶 っ み……………第一ばん
大昔の狩……………第五ばん
昔の漁業、今の漁業…先生、第四ばん

次のような事を考えてみたり、してみたらどうでしょう。

- 1、疎開してきている人たちの職業をしらべてみることに。
- 2、疎開の人たちが村のために役だっていることを考えてみることに。
- 3、種もみの保存のしかたやまきかたをしらべてみることに。
- 4、苗代のつくりかたをしらべてみることに。
- 5、本ができあがるまでのありさまを、昔と今とくらべてみることに。
- 6、自分たちで本をつくるには、どんな準備が必要か考えてみることに。
- 7、自分のいる場所や身のまわりを氣持よくするくふうをすることに。
- 8、みんなの意見をまとめ、きめられたことを実行するには、どんな注意が必要か考えることに。
- 9、委員のえらびかた、委員としての仕事のしかたを考えてみることに。
- 10、学級の人たちの学習する態度をよく見て、自分の態度とくらべてみることに。

三、さまざまの協力

田 　　う 　　え 　　　　　 第二ばん

ことしもつゆをむかえて田うえをしました。

私たちのおとうさんおかあさんは、かさをかぶり汗を流しながら、牛をおいおい、一年じゅうたべるお米のつくりはじめに、苦心なさいます。

このころは、もう感心なつばめが日本に帰ってきています。「やあ、帰ってきた。」とみんなで迎えながら、田うえの仕事をします。おとうさんやおにいさんは、牛につけたすきのうしろにつかまりながら、どろ水の中をいつたりきたりして、田うえの用意をします。

この用意のできた水田には、なわをはり、おかあさんやおねえさんが苗をはこんで、水田にはいつて手早くうえていきます。

おかあさんをまつている赤ちゃん、田のあぜ道にしいたむしろの上で、小さなにい

さんやねえさんに子守をしてもらっています。おかあさんがそばにくと、おちちがほ
しいのか、ベソをかいでだかれたがります。するとおかあさんは、どろの手を見せて
「だめだめ。」とくびをふります。赤ちゃんはききわけがなく、なきながら、おかあさ
んにだかれようとします。おかあさんはあやしなげに、「ほら、とつと、とつと」とつば
めをゆびさします。赤ちゃんがその方を見ているうちに、おかあさんは、またいそがし
そうに田うえの方にいかれます。

ひるごろになると、学校にいつている一、二年生の子どもたちが帰ってきます。赤ち
やんはさもうれしそうに笑い、手をふるようにして迎えるのです。田ではたらいでいた
人たちも、そこでおべんとうをひらいたり、家に帰ったりしておひるにします。おひる
ごろは、たんぼも一時静かになり、おべんとうをたべている人たちの笑い声や、かえる
のなく声が、はつきりときこえてきます。

ひるからは、またみんないっしょうけんめいに働きます。夕方になると、馬や牛もだ
んだんつかれてきたらしいようすを見せます。それでもみんなはげましあつて、暗くな

るまでやります。

もうあちらこちらにうえつけのすんだ田が見えてきました。そして、ひるまはえんり
よしていた、かえるのなく声はげしくなってきました。」

これは、ともえさんの書いた文です。二はんの人たちの、田うえのようすを書いた文
の中で、ともえさんのがえらばれたのです。

田うえ時 第三ばん

田うえの時は、一年じゅうでいちばんいそがしい、しかしまた、それだけ楽しみの多
い時です。おとうさんもおかあさんも、にいさんもねえさんも、おとなりの家の人も、
手つだいの人も、牛も馬も、だれもかれもがいそがしい時です。

見わたすかぎりのたんぼはどこも人でいっぱいです。年よりも子ども、男も女も、
家じゅう、村じゅう総出です。よその家、よその村からも手つだいの人がきています。

お茶やおひるのときには、あちらでもこちらでもにぎやかな笑い声がします。

ぼくたちは、田うえのときにみんながどんなに助けあっているか、ということを考え



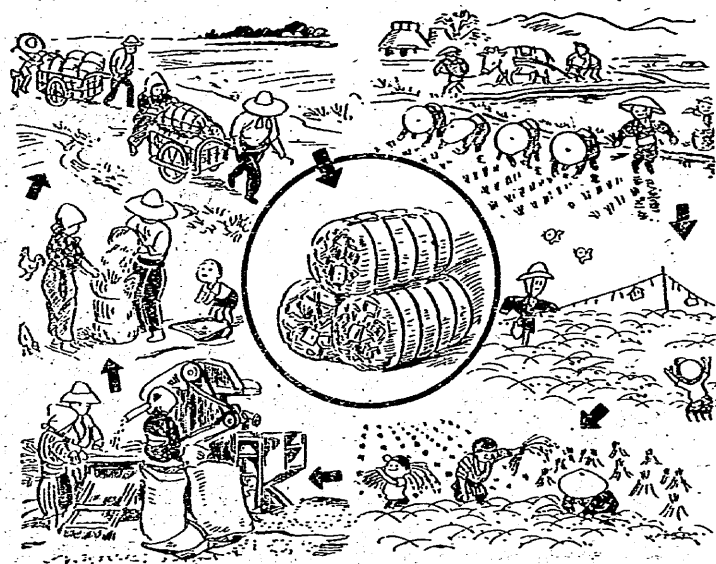
かんたんな道具を使って、
田畑をたがやす人たち。田
畑をたがやすには、どんな
道具があるでしょうか。



馬の力をかりて土地をたがや
す人。馬や牛は、そのほか、
どんなふうにして、人々の手
だすけをするでしょうか。



トラクターを使って土地を
たがやす人。どんな所で使
うとつこうがよいでしょ
う。



たりしらべたりしました。

一、田を起すには、牛や馬が、ずい
ぶん人間の手助けをします。牛や馬の
いない家は、なかなか骨がおれます。
牛や馬を借りてやる家もあります。牛
や馬もずいぶん働きますから、田うえ
のときは、特別にごちそうをしたりし
て、いたわってやります。はなをひつ
ばらないでも、どんどん田を起してい
く馬や牛を見ると、ほんとうに感心だ
と思います。

二、牛や馬のひくすきや、人のつか
うまんがが、仕事の進みぐあいに関係

することもたいしたものです。これらの農具は、村のかじ屋や町の工場の人たちがつくつてくれたのです。田うえの前には、どの家でも農具をしらべて、ぐあいのよいように手入れをしたり、たりないものをととのえたりします。

三、起した田には、十分肥料をやらなければなりません。つみごえは家ごとにつくりますが、金肥がたりないので、このごろは、どの家でも苦勞しています。農業会からの配給では、なかなかたりないといっています。農業会のおじさんにきいてみたら、肥料がたりないのは、たくさん肥料工場が使えなくなったり、肥料にたりないものがあつたりするためもあるが、やはり石炭や電力がたりなくて、工場の生産があがらないからだと教えていただきました。工場の人たちは、それでも食糧増産の源ですから、いっしょうけんめいにたくさん肥料をつくるようにつとめていてくれるのです。また石炭を掘る人たちも、肥料の生産がどんどん行われるようにと、夜も晝も、地下の炭坑で働いているのです。ひとにぎりの石灰窒素にも硫酸にも、石炭を掘る人、工場で働く人、製品を輸送する人、これを配給する人たちの、たんせいがこもっていることを思うと、田う

えには、こういった人たちもいっしょに働いているようなものです。

四、おとうさんたちやおにいさんたちは、牛や馬や農具や肥料の心配をするほかに、水のことや手つだいのこととも相談しなければなりません。田うえはその年のみのりにたいへん関係しますから、村では、昔からみんながよく相談しあつて、みんなのつこうがよくなるようにくふうし、助けあつています。水のこと、耕地整理のできている所ではわりあいにくですが、そうでない所では、なかなかたいへんです。毎年のしきたりをもとにして、よくよく相談しあつて田うえの順番をきめ、助けあいのしかたをきめます。

いよいよ田うえにかかるとなると、どうしても手がたりなくなります。ですから、近所となりで助けあつたり、となり村の人をたのんだりしてやります。疎開の人たちでも手つだう人があります。金子さんのおかあさんも、上田さんのお家の田うえを手つたわれるので、みんな感心しています。

五、田うえのときは、どこの家でもいいそがしいので、炊事もおかあさんがしないで、

おばあさんがなさったりします、子どもも、お茶やべんとうをたんぼにはこんだりします。手つだいの人がきたりすると、炊事はまけたいへんです。前には、この村でも、部落によつては共同炊事をしました。食糧があまりきゅうくつになつたのでやめていますが、そのうちまた行われるようになるでしょう。

六、三年から上の子どもは、家の手つだいができるので、農はん休みになりますが、一、二年の子どもは学校へいきました。赤ちゃんはまだよいのですが、はいはいする子や、よちよち歩く子は、どこの家でもしまつに困ります。また学校へはいる前の五つ六つの子も、おかあさんたちがいそがしいので、うろうろして、あぶないことをしたりします。それで、大きい子どもたちが子守をします。西の部落では、疎開の女の人たちが女子青年と相談して、農はんたく兒所をひらきました。砂場やぶらんこもできました。町の女学校からも手つだいの生徒さんがきてくれました。

七、田うえのときは、一度に手がたくさんあるので、どこでも非常にいそがしく、みんながほんとうに氣をそろえて働きます。だからたいそうゆかいです。みんなの助けあ

つている生活が、どこにも見られます。私たちの研究はまだまだたりないと思いますが、みんなでもつとつけ加えてください。」

これは三ばんの人たちが、話しあつてまとめたものだそうです。

大昔の狩

第五は 人

私たちは、大昔、まだ人間が今日のよう便利な生活をしていなかった時代に、人々が食物を手に入れるためにどんなくふうをし、またどんなに力をあわせて働いていたかをしらべてみました。

はじめは、なかなかよい本もなく、どうしてしらべたらよいのかわからなくて、たいそう困りました。先生におうかがいしたら、「お寺のおしょうさんが、たいへん勉強家で、本をたくさんもつていらつしやるから、何かあるかもしれない。おしょうさんをお願いしてみますから、もしよいとおっしゃったら、いつてきいてみてごらんさい。」といわれました。

一、二日たつて、先生のお話があつたので、山本君とよし子さんがお寺にいきますと、

おしょうさんは、大昔のことを書いた本を何冊も見せてくださいましたが、そのうちでいちばんやさしいのをお借りしてきました。

しかし、みんなで読んでみると、あまりいろいろのことがたくさん書いてあつて、どうまとめたらいかわかりませんでした。一時は、やめてしまおうかとさえ思つたのですが、しかしみんなで元氣を出して、読みながら必要なことだけを書きぬいてみました。ところが書きぬいて、こまかく読んでみると、はつきりしないところや、わからないことがたくさん出てきました。みんなで字引もひいてみましたが、それだけではまだまだはつきりしません。そこでもう一度、こんどはほんのものがみんなで、おしょうさんにわからないことをおききして、そのお話と本の書きぬきをまとめて、つぎのような文にしました。

大昔の人々は、自分が住んでいる土地にはえている植物の芽や、くき・葉・根・実などを取り、自分よりも力の弱い、あまりすばしくない動物をとらえて、食物にしてい

ました。また、動物の皮や、植物の葉などをきものにし、自然のほら穴などをすまいにしていました。それは、あまりほかの動物とがわらない生活です。身ぢかに食物になる植物がなかったり、動物がいないときは、野山をかけまわつて、さがしてあるいたことでしょう。けれども、一日じゅう野山をかけまわつても、えものが手にはいりなかつたこともあります。そんなときには、食物がないままでもまんしてなければなりませんでした。

そういうことをふせぐためには、えもののたくさんとれるときに、できるだけたくさんとつておく必要があります。木の芽、草の芽のはえる春さきや、果実がみえる時期、根のとりやすいころには、いっしょうけんめい、それをとつて集めました。魚のたくさんとれるとき、けだものがたくさん集まつているときなどは、もつともよい機会です。しかし、植物の場合は、逃げていかないからよいのですが、動物の場合は、足やつばさがありますから、へたをするとたちまち逃げられてしまいます。

人々は、動物をうまくつかまえるために、いろいろなくふうをこらしました。はじめ



は、ただ手でとらえたり、手ごろな石や木ぎれを使つて、これをなげつけたり、ついた
り、さしたりしていましたが、やがて石に
さいくを加えて、なげやすく、ねらいやす
いようにつくることがはじめました。また
弓を発明して、矢のさきに小さな石のやじ
りをつけたり、棒ぎれのさきに、するどい
石や骨をつけてやりにしたり、あるいはま
だ、かんたんなしかけのわなや、落としあな
をつくつて、動物をとるようになつてき
ました。

このような方法は、ながい間のくふうや
苦心によつてだんだん発達してきたもので
す。だれかがふとしたことからよい方法を思いつくと、ほかの人たちもそれをみならい、

さらに新しくくふうを加えたり、ほかの方法をあわせ用いたりして、いろいろな道具や
方法をしだいにりつばなものにしていったのです。

たとえば、草のくきやつるは、一本だけでは弱い、これを何本かよりあわせれば、
ずつとじょうぶなものになつてきます。このことを発見した人があつてから、人々は、
それをみならつて、じょうぶなひもやなわをつくるようになりました。一方、木の枝や
竹の枝が弾力にとみ、これをまげててもすぐもとにもどることを應用して、前のひもを使
つて弓をつくつた人もありました。矢ははじめ、細いまつすぐな枝を使つてみたのでし
よう。すると他の人々もこれをまねて、さかんに使うようになつてきます。

またある人々は、石ころをたたいたりみがいたりして、するどい道具にすることを知
つていましたが、だれかがこれを矢に應用して、矢のさきに石のやじりをつけてみまし
た。ただの木の矢よりは、石のやじりのついた矢の方が、うまくえものにあたり、しか
もぶつとりと深くつつ立ちます。また、ある人々は、石のやじりをつけることは知らな
かつたかわりに、矢のうしろに鳥の羽をつけて、矢をまっすぐに飛ばせることを発見し

ました。この二つの発明がむすびつけられて、石のやじりと羽のついた矢ができてきました。

この弓矢のできた順序は、はたしてこのとおりであつたかどうかはわかりませんが、しかし、はじめからひとりの人が、りっぱな弓矢をつくるようになったのでないことだけはたしかです。一本の矢にも、数知れない人の発見とくふうとがふくまれているのです。弓矢ばかりではありません。きものにしても、家にしても、その他の道具にしても、どれもこれも、たくさんの人々の努力と苦心がつみかさなつてできたものです。

人々は、はじめ、人間よりも力の弱い、小さなろまの動物だけをとつていました。けれども、いろいろな方法を考えつき、しだいにりっぱな道具をつくるようになると、それを使って、すばしい動物や、大きなけだものもとれるようになり、だんだんと自信もつてきました。

はれども、せっかく動物の大群をみつけても、そのうちの一匹を殺してしまうと、ほかの動物は、すわいちゃいじとばかりに逃げさつてしまいます。これでは、どんなにだ

くさんの動物のむれをみつけてもなんにもなりません。ことに、大きな、力の強い、おそろしい動物の場合には、ひとりでは手も足も出せないわけです。

ですから人々は、そのような動物のむれをみつけた場合、あるいは、動物のむれをみつめようとする場合、近所の者がつれだつて出かけていき、協力して一度に全部をとらえようしました。

アメリカには、バイソンという野牛が非常にたくさんすんでいたそうです。大昔のアメリカインディアンたちは、このバイソンのむれをみつけると、部落の男が全部出ていってこれを三方からとりかこみ、大声をあげたりさわいだりして、バイソンをおどかし、しだいしだいに谷の方に追いつめていきました。バイソンは人々の声におどろいて、人のない方へ逃げていき、とうとう谷のがけからころげおちて、死んだりけがをしたりして、人間にとらわれてしまったということです。

こんな場合も、大群にむかつて、ひとりだけでかかったのでは、かえってバイソンのためにやられてしまったかもしれません。みんなで協力したからこそ、一度に多くのバ

イソンをとることができたのだと思います。人間がほかの動物をすんずんひきはなして、やばんな生活から今日のような進んだ文明の生活をするようになったのも、一つにはほかの人のよいやりかたをみならつたり、それに自分でくふうを加えたりしたためですし、また自分のちえをほかの人々にもかして、強いけどものや、自然の暴力の前に、力をあわせてきたためです。

昔の漁業、今の漁業

先 生

大昔の人たちは、野や山で鳥やけだものをとるほかに、海や川などで貝や魚をとって食物にしていました。

狩りの方は時代が進むとともにだんだんおとろえて、毛皮のとれるけどものいる北の國をのぞいては、ほとんど楽しみが主となってしまいました。しかし漁の方はだんだん進歩し、現在でもこれによつてくらしを立てている漁師の人たちがたくさんいます。もちろん、今の魚のとりかたは、昔のとはずつとちがっていますし、漁師は、自分たちがたべるために魚をとるのではなくなりました。とつた魚や貝は、これを賣っておかね

にし、そのおかねでお米や野菜や着物を買つたり、住居や家財をととのえたりしているのです。一方そのおかげで、町に住んでいる人や、海からはなれた土地や山に住んでいる人も、魚をたべることができるようになっています。わが國では、魚は動物性の食品としても、農作物の肥料としても、きわめてたいせつなもので、漁業が重要な産業の一つになっているわけです。

大昔の人は、どんなにして魚や貝をとつたでしょう。網もなく、つりばりもないころには、どうして魚をつかまえることができたのでしょうか。貝は潮のひいた時に、浜やいそを掘つてとればよいのですから、あまり苦勞はしなかったことと思われれます。しかし魚は、そういうわけにはいきません。

あなたがたが、なんにもたずにいそにいつて、魚をみつけたらどうしますか。きつと魚をせまい浅い所に追いこんで、手づかみにするでしょう。大昔の人たちも、はじめはそんなやりかたで魚をとつたのだと思います。

けどものをとるのにやりを使うようになってきてからは、魚をとるのにもやりを使い

ました。しかし大昔はやりといつても、さきは金属でつくつたものではありません。とがつた石のかけらや、けだものの骨などでつくつたのです。これで魚をついてとるのです。海や川の岸にいて、水中の魚をつくばかりでなく、だんだん深い所にはいつていつて、およぎながらついたり、もぐつてついたりするようになりました。この魚をつくことは、現在でも方々でやっています。たとえば、つきんぼうといつて、もりでまぐろをついてとる方法は、房州の南の海岸の漁師がやっています。くじらをとるのも、このやりかたの進歩したものといえます。

人間が金属を使うようになったのは、たいへんな発明ですが、どのだれがはじめたということはいえませんが。しかし、おそらく何代も何代もかかった経験の結果だつたでしょう。金属を使つておのや小刀やなべなどをくるようになってからは、つりばりも金^{かね}のものを使つて魚をとることがはじまりました。つり糸も、きつとけだものの毛をよつたものや、草や木の強いすじを使つたことでしょう。つりでは、深い所にいる魚や、沖の方にいる魚もとることができます。しかし沖でつるには、舟を出さなければなりま

せん。だから二人か三人が組になつて、魚をとりにいくようになってきます。それとともに魚のとるかたもだんだんくふうをつんできて、ざるや網をつくつたり、やなを川にしかけておいて魚をとつたり、つばを海の中においてたこをとつたりするようになります。これはおもしろいばかりでなく、手かずがかからないので便利です。「なわ」といつて、なわにつりばりをたくさんしかけておいて魚をとるのも、つりの進歩したものです。網にも四ツ手網のようなものから、じびき網やだいぼう網、そびき網のような、さまざまのものがあらわれてきました。魚の習性とか、およいでいる場所とか、いろいろなことを考えにいれて、しだいに網の種類も、網によるとりかたも進歩していきました。

いわしは、この地方ばかりではなく、日本じゅうどこでもたくさんとれる魚ですが、これはたいいてい網でとります。じびき網などは、二百メートル以上もある大きなものもありますから、漁師がめいめいでもつてゐるわけにはいきません。だから、部落や村の人たちが共同でもつていたり、網元といわれる人たちがもつていて、おのおの漁師がそ



の網元に属しています。ほかの魚をとる大きな網でも同じことです。こんな大きな網をしかけたり、それで魚をとったりするにはみんながほんとうに助けあわなければなりません。また魚は、いつでもうまくとれるとはかぎりませんから、えものを分けあつたりすることも、おたがいのためにぜひ必要なことです。じびき網を引くときには、船の人だけではなく、浜べにいる人がみんな出て手つだいます。また魚見^{うみみ}といって、ふだんいわしが沿岸によせてくるのをみつける役目の人もいなくてはなりません。漁船をつくつたり、いらない時に浜べにあげて手入れしたりすることも、みんなが力をあわせてやらねばならない仕事です。もちろん大昔の船は材木を組みあわせたような丸木船をつくるのも容易なことではなかったでしょう。木をきりたおして枝

をはらい、皮をむき、けずつたり、くりぬいたりするのは、とても一人ではうまくいきません。だから、みんなが力をあわせて働きます。したがつてその船も、はじめはみんなのものだったのです。いまでも部落や漁業組合で船をもっている所があるのは、そのころのふうが残っているのだと考えられます。

そのうちに船もだんだん進歩して、板と板をじょうずにあわせてつくるようになり、一方では船を自分でもつ人もできてきました。船をもっている人は、船をもたないなまをたのんで、いっしょに魚をとりにいき、とれた魚を分けあいます。今でも船の分けまえをとつて、あとをみんなで頭分けにする所がたくさんありますが、こんな分けかたも、みんなが五分五分のたてまえで力をあわせていた昔のやりかたのなごりでしょう。船をもっている人がだんだんお金持になり、みんなの頭かぶになると、はじめから人やとつておいて、船の世話や、漁の手つだいをしてもらうようなことも起つてきます。船のほかに、網がだいじな道具となる場合にも、おなじようなことが見られます。船も網もみんなのものであれば、とつたものはみなで頭わりにし、船の手入れも世話も、

網をほしたりつくろったりすることも、漁のときのいろいろな仕事も、みんなが力をあわせてやります。ところが船や網がだれかの持物となると、その人たちは、他の人よりよけいの分けまえをもらったり、他の人をやとつて働いてもらったりするようになります。こうなるとかなりこみいってきますが、それでも、おたがいが助けあつてくらしを立てていくということにはかわりありません。

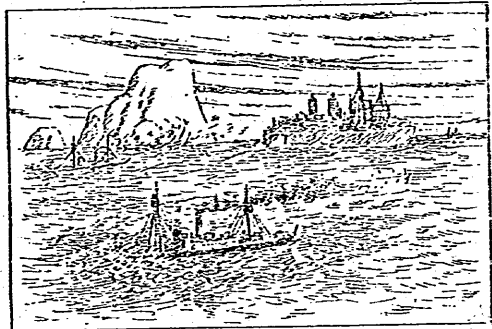
魚がたくさんいてえものの多いうちは、だれがどこで魚をとつてもかまわなかったのですが、魚が少なくなってきたり、また魚のとれる場所がはつきりわかつてくると、漁場というものに対して、これを使う権利をやかましくいうようになります。この村は海のそばにありながら、漁業で生活している家は一つもないでしょう。浜にきて魚をとる人たちは、みなとなりの町の漁師です。これはこの村の浜の漁業権を、町の漁業組合がもっているからです。この漁業権は、村や町や、あるいは組合がもっていることもあり、会社や網元といわれる個人のもっている場合もあります。漁業権も、もともとは、その漁場で漁をする人たちの共同のものであり、その人たちの生活を守り、他の人たち

とむやみに争わないためのものであったのです。

漁場のことをやかましくいうと、とれる魚の量にもきりがありますから、元氣のある人たちは、もつと廣い自由な海に出ていって魚をとろうとします。またそればかりでなく、いろいろな原因で漁業のきびが大きくなり、船も発達してくると、自然遠く出ていくことになります。しかしそのためには、食物や水をつんでいたり、とれた魚をいれてくる場所があるような大きな船が必要なりません。そこでだんだん大きな船がつくられ、帆を使つたり、大きなろを使つたりして、遠くの海に出かけるようになります。勇敢な人々が十人十五人と組をつくり、ときにはいく組かの船がつれたつてかとおやまぐろをおいかけます。このような漁のやりかたが遠洋漁業とよばれています。この附近の漁師たちも、かなり昔から遠く金華山沖や八丈島の方まで出かけています。現在では発動機船ができましたから、ますます遠くまで出かけることができます。もつとも戦争からこのかた、油が十分に手にはいらなくなったのと、発動機船もへつたのとで、だいぶおとろえました。しかし、まだだんだんとさかんになってくることでしょう。

このような遠洋漁業は、今も昔も大きな冒険です。どうして冒険なのかわかりますか。第一に、昔は、大きいとはいっても多くは木造の漁船で、ラジオもなしに、十人内外のものが廣い海に出ていったのですから、いつしけにあつて船がひっくりかえるかわからないし、どこまで流されてしまうかわからなかったのです。今では小さな船でも、羅針盤はもとより、ラジオさえありますし、少し大きくなれば無線電信の装置をもつていて、近くの船や陸上とれんらくし、天気ぐあいを知つたり、位置を知つたり、危険を知らせたりできます。したがつて、昔とくらべればはるかに安全になりましたが、それでも機械が故障したり、天氣の急な変化にであつたりして、これをさけられないこともあるので、やはり冒険であることはかわりません。しかし遠洋漁業が冒険だというわけは、もう一つあります。それは、そんなに苦勞してはるばる出かけていっても、必ずしも思うように魚がとれないことがあるのです。もちろん、ときには不漁の場合があるのは当然ですが、遠洋漁業では漁が大じかけですから、そのあたりはずれはきわめて大きなえいきょうをあたえるわけです。これも漁業に関する知識が増じ、技術が進歩するに

つれて、だんだん不漁の場合をさけることはなりませんが、やはり程度の差にしかすぎません。



こういつた冒険をおかして遠洋漁業に従事する人たちは、とくにおたがいに助けあうことが強いのです。海上での災難を防ぐためには、乗組のものがほんとうに氣をそろえて、自分自分の仕事をするのが第一だからです。遠洋漁業に出かけている人たちの家族もたがいに助けあつて生活します。

船主の家では、乗組の人たちの家族の食糧その他、入用のことについて親切に世話します。そういうしくみになつていればこそ、遠い海でも家のことは心配しなくて十分働けるのです。遠洋漁業から歸つてきて、とれた魚を賣つてえたおかねもなかよく分けます。いくつかの船が組になっているときは、えものの多い船や少ない船が

あつても、おたがい平均して収入を分けあうようにします。これも、助けあいの力で不漁の損害を少なくする方法です。みんなでえたおかねの一部を、共同の資金としてとっておく所もあります。こういった助けあいは船主や網元が中心になつてゐるものが多かったのですが、近ごろはだんだんと組合が中心になつてやるのも出てきました。

遠洋漁業がとくに大じかけとなつたものとしては、蟹工船や捕鯨船があります。これらは何百トン、何千トンという大きな汽船で、たくさんの乗組員をのせ、船内には漁獲物を処理する工場がついています。母船のほかは数隻または十数隻の子船をひきつれて、あるいは北洋にあるいは南極洋にまで出かけていきます。

漁業はわが國の重要な産業ですが、これから十分に研究を重ねて、漁業に従事する



人たちがかくたく助けあい、また他の職業の人たちともつと力をあわせるようにしていかなければ、こんごの大きな発達はのぞめません。たとえば石油が十分になれば、漁船の活動は思うようになりません。また、漁獲物の輸送や加工の方法をもつとくふうしなければ、新鮮な魚を國內に配給することも、輸出品としての干した魚類やかんづめのよい製品をつくることも、うまくいかなくなります。また昔からのしきたりにばかりたよつてゐるふうをなおさなければ、漁業に従事する人たちのもつ相互扶助の美風もいさづまつてしまいます。この村には漁業をいとなんでいる家がありませんが、しかし村の出身の人には、町にいつて漁業に従事している人もあり、町の水産会社に資本を出している人もあります。きみたちのなかからも、將來この方面に進んで、水産日本のためにつくしてくれる人があることと思います。たとえば、だれもその方面に進まないとしても、きみたちが漁業に従事している人たちの仕事をほんとうによく理解し、その人たちのために、きみたちのできるだけのことをすれば、それで十分役立つことになるのです。

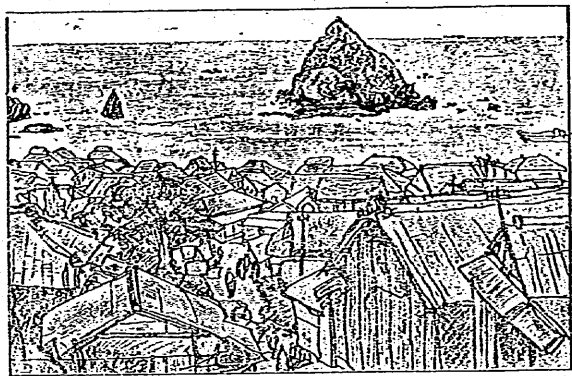
こんどきみたちが、この「さまざまの協力」という本をつくらうときめ、先生にも第四

ほんの人たちといっしょに漁業に従事する人々の協力のことを書くように頼んでくれたのは、ほんとうにうれしいことでした。漁業とこれを中心とする漁村の生活についてはおもしろいことがあまりたくさんあつて、どんなふうに書いたらよいか、先生も困ってしまいました。漁業の進歩したのは、名も知れない私たちの祖先の長い間のたゆまなく、くさくさとしてまた今後の漁業の進歩や、漁村の人々、ひいては私たち全体の生活の向上もまた、みんなのたゆまないくさくさや発見と協力によるものであることを考えてください。

漁業部落の見学

第四 ほん

私たちはこのあいだの日曜日、みんなで磯村へいきました。磯村はとなり町の漁業部落です。となり町のにぎやかな通りをすぎると橋があります。橋の上までくると石油の香がぶんとしてきます。下手を見ると、発動機船が五、六ぱいとまっています。橋をわたってしばらくいくと、両がわの家のようにすがわつてきて、とこ屋やふる屋や飲食店



風景の漁業部落

が、小さな家に入りまじっているのが目立ちます。川岸の方に漁業会の建物や倉庫があります。倉庫のむこうにいわしをにる小屋があり、そのそばにいわしがたくさんほしてありました。道がちよつとのぼりになった所の右がわにお寺があります。そこをすぎると、急にひろびろした太平洋が見えてきました。道も急にせまくなり、前よりもつと小さな草ぶきの家が、海岸までびつぱりと立ちならんでいきます。弁天島をはじめ、いくつもの島や岩が見えて、たいそうよい景色です。家はわりあい小さくて庭がありません。道のふちなどに少しえんどうやとうもろこしがうえてありますが、畑もほとんどありません。ひらいた魚が、あちらこちらにほしてあります。子どもたちは、みな砂浜に出て遊んでいました。もうおよいでいる子どもたち何人も

いました。

男の人たちのすがたはあまり見かけることができません。年とった人が二、三人、砂浜で網をつくらっていました。女の人たちは、せんたくをしたり、炊事をしたり、いそでのりをとったりしていました。せんたくや炊事を、井戸ではなく、共同の水道でやっていたのには感心しました。

井上君とはる子さんとは、漁業会の事務所で、ぼくたちのもつていった質問に答えていただきました。あとのものは、あたりの景色や、部落の家や舟や網などの写生をしました。べんとうはみんなで海べでたべました。それから、いそで海草や貝を採集して帰りました。

まぐろ延縄の話

第四 ばん

漁業会の事務所で、かつお漁業の一例としてまぐろ延縄の話をききました。

まぐろにはビンナガ・キハダ・クロマグロ・メバチの四種があり、ふつうカジキもそのなかまにいられています。まぐろ延縄には大縄・中縄・小縄の三種があり、大縄は

クロマグロ、中縄はキハダ・メバチ・ビンナガ、小縄はビンナガをとるのに用います。

クロマグロは、ただマグロともいい、二三十貫のものがふつうですが、大きいのは百貫もあるそうです。岸の近くでは、だいたい網、落し網でもとりますが、将来重要なのは、遠洋漁業の中の延縄によるものです。

延縄（大縄）の一鉢は、次のようなものからできています。

みき縄Ⅱ なんきんあさの縄、直径二分五厘、長さ百六十尋。

えだ縄Ⅱ みき縄とはほぼ同じもの、十五尋から二十尋のもの二本、四尋のもの四本、合計六本を、みき縄百六十尋の間につける。おのおののえだ縄には、麻のしんに綿糸を巻いたもの（長さ三尋）をつけ、それにまたはりがね（二十五番線）を九本よったもの（長さ一尋半）をつけてつりばりをつける。

つりばりⅡ 直径一分五厘から一分八厘、長さ三寸五分から四寸二分の鉄でつくる。

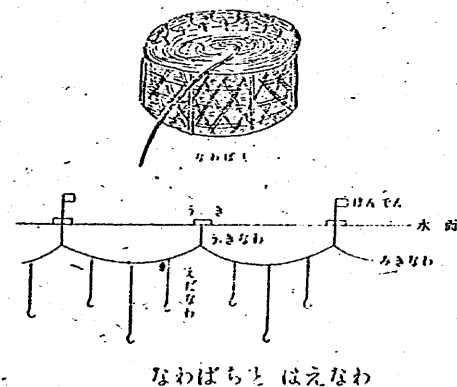
うきⅡ 直径三寸、長さ三尺ぐらいの桐丸太を、みき縄一鉢について三つつける。

ぼんでんⅡ 長さ十五尺ぐらいの竹の先に小旗をつけためじるしで、みき縄一鉢につき一本ずつ、うきにつけて水上にまっすぐ立てる。

繩鉢Ⅱ一鉢（百六十尋）すつをいれておく竹のかごで、直径二尺高さ二尺ぐらいある。

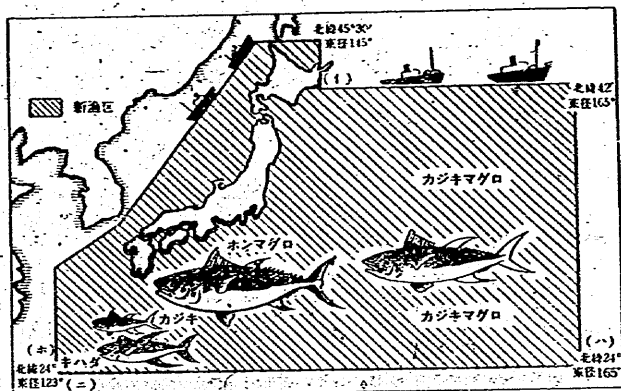
延縄は、秋から翌年の春にかけて、西風のはげしい季節に使われます。だからその船もとくにじょうぶにつくり、百トンから百二十トンぐらいで、二百から二百五十馬力のディーゼル機関をすえつけたものが多く、延縄捲揚機まきあげ、探照燈をそなえ、無線電信電話機、漁獲物貯藏の設備などもあります。

漁船の基地では、いつでも、漁場の状況や天候について、情報を集めています。そして、いよいよ漁に出かけるときは、船や機関に故障がないかどうかをしらべ、漁具やえさや燃料、氷、食料、飲料水などをつみこんで、けんとうをつけた漁場にむかつて出発します。一航海は一月以上におよぶことがあります。



漁場が近くなると、見張りのものは少しのゆだんもなく海上をみはつて、他の船の行

動はもちろん、海鳥の集まりかた、潮流や水温などに注意します。そしてためしにはり



わが國の漁区とまぐろの漁場

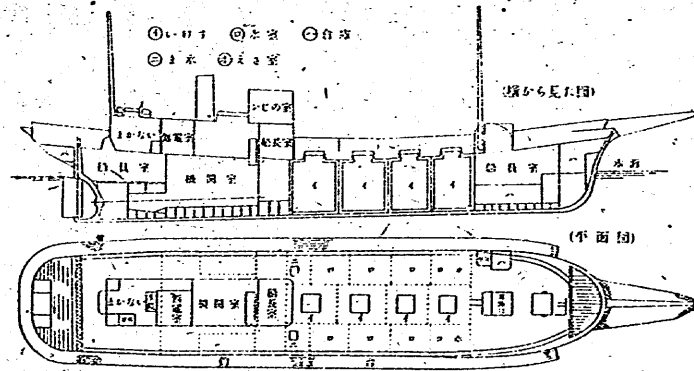
をおろしてみたりして、魚群がいるかどうかをし
らべながら航海していきます。いよいよ漁場に着
きますと、船長の命令で乗組のものはそれぞれ持
場につき、延縄にうきやぼんでんをつけ、船の速
力をかけんしながら、縄を海に投げます。五、六
十トンの船でも百鉢、百五、六十トンの船だと二
百鉢から三百鉢をつないで投げこむので、縄の全
長は二十海里以上になります。えさはスルメイ
カ・ヤリイカ・ムロ・イワシなどです。このよう
にして、間を通るクロマグロをまちぶせるわけだ
す。

縄を入れて適當な時間がたつたら、縄の一方のはしから引きあげていき、鉢を整理し

ます。そして、とれた魚を処理して貯蔵し、次の行動にうつります。

マダロは日本人には親しみの深い魚ですが、沖に出てとるようになったのは明治以後です。それも明治の中ごろまでは、小さな和船で、しかも帆をかけて漁に出たので、せいぜい岸から二、三十海里、一航海三、三晝夜にかぎられていました。しかも冬の海のあらいに漁をするため、遭難する船が多かったのです。

それが明治のおわりごろ、発動機のある漁船がふえてから、もつと沖に出ていくようになり、漁船の数もふえました。さらに航海や漁の技術が進歩し、船も改良され、延縄などが使われるようになり、また船内に冷蔵の設備ができたり、無線電信が利用されるように



まぐろの漁船

なつてからは、いよいよ遠方に出るようになったのです。東は太平洋上二千海里、南は赤道以南まで出かけていったことがあります。ことに冷凍にしたり、かんずめにしたものが海外に輸出されるようになって、このまぐろの漁業は非常に発展しました。今後、捕鯨やトロール漁業、かつお漁業などとならんで、さかんになればならないものです。

次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。

- 1、「さまざまな協力」の他の部分はどうなふうにできなか、考えてみることに。
- 2、現代の農業はどんなにして発達してきたかをしらべること。
- 3、家畜のはたらきや飼いかたや、その歴史についてしらべること。
- 4、農業と鉱業や工業との関係についてしらべること。
- 5、農はん期の共同炊事や、たぐい所のことをしらべること。
- 6、肥料その他の入用な品物の配給のみちすじをしらべること、昔と今との手に入れかたをくらべることに。
- 7、衣食住について大昔と今とをくらべてみることに。
- 8、現在の水産業はどんなにして発達してきたかをしらべること。

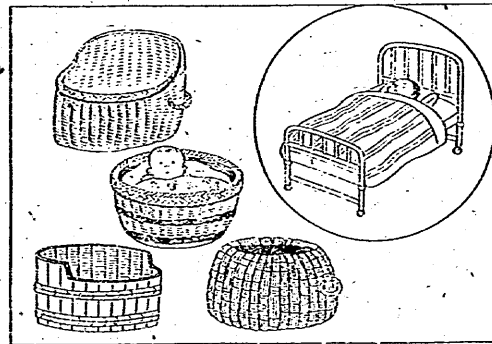
- 9、いろいろな製塩法をしらべてみることに。
- 10、漁業部落を見学して、衣食住のすべてについて、農業部落とくらべてみて、なぜかについて考えること。
- 11、さまざまな土地の利用のしかたをしらべてみることに、裏作のことや漁村の菜園や土地の使いかたを考えてみることに。
- 12、物の生産に関係して、交通がどんなに発達してきたかをしらべてみることに。
- 13、町の商店をしらべ、賣る品物、店の位置、店の数などを地図にあらわすことに。

四、誕生日

きょうは、くに子さんのお誕生日です。三郎君はもちろん、進君、すみ子さん、はる子さんの新聞係の委員は、お祝いの夕食によばれました。

くに子さんのおとうさんは、くに子さんが三つのときに、またおかあさんも五つのときになりました。それに戦争中はおにさんが兵隊にいつたので、ずいぶんさびしかったのです。小さいにいとさんとふたりでるすをしていました。ちょうど東京におよめにいつていたおねえさんの一家が疎開してきて、いろいろ世話をしてくださったのですが、それでもなかなかたいへんでした。しかし戦争がおわつて、おにさんがお帰りになると、まもなくおよめさんがこられて新しいおねえさんができましたし、今まで人のお世話になっていた田や畑もまたお家の手にかえて、急ににぎやかになりました。おにさんは高等科しか出ていられませんが、酒もたばこのまれず、おとろえてしまった家運をとりかえようといつしょうけんめいに働いていられます。おねえさんは町

の女学校を卒業されましたが、毎日まっ黒になってのら仕事をしていられます。去年赤ちゃんが生まれました。



たいそう元氣が出てきて、いつも夕飯のときなど、その話をするので、おにいさんたちもおねえさんも、興味をもつてなにかとちえをかしてくださったりします。まだ新聞の

めづえとベッド

おにいさんもおねえさんも、たいへん進んだ考えをもつていて、農家の生活を明かるくしようとつめていられます。ひとつには、にいさんのるすちめうさびしかつた、くに子さんや小さいにいさんの心を、びき立ててくださるおつもりもあるようです。このへんでは、子どもの誕生祝いに、そのお友だちをよぶというようなことはありませんが、おねえさんたちのお考えで、新聞の係の人をよんでくださつたのです。くにさんが新聞の係になつてから、

なかまの人たちのことなども、いろいろと話にきかれて、たいそうよろこんでいられるので、きょうもその人たちをよんでくださつたわけです。もつとも三郎君は家が近いので、しじゆういききしています。

きょうは日曜なので、くにさんは朝からおねえさんのお手つだいです。赤ちゃんは奥座敷のおにいさん手製のベッドにねていて、たいして手がかかりませんが、おねえさんのお料理はずいぶん念いりなので、朝からたいそういそがしいのです。

約束の五時になると、三郎君をはじめ、そろつてやつてきました。したくがまだできないので、女の子はみなでお手つだいです。座敷に食卓をならべたり、それをふいたり、かびんにダリアをさしたり、座ぶとんを出したり、かいぶしをたいたり、おねえさんのさしずどおりにやりました。くにさんはお台所の方もお手つだいています。三郎君と進君とは、えんがわに腰をかけて何が話しています。

にいさんと小さいにいさんが、早めにのちから帰つてこられました。みんなを見て、「おやおや、お客さんに働かせて。」と笑いながらあいさつなさいました。

食卓の用意ができたときには、おにさんたちも、おふろをすませて出ていらつしやいました。座敷に食卓を二つならべて、八人がぐるりとすわりました。まんなかのかびんには赤いダリアがさしてあつて、見た目にもぎやかです。おいしそうな五目ごはんが、めいめいのおさらにもきれいに盛りあげてあります。すい物のおわんも、お魚のおさらも、ひとりひとりそろえてあります。新鮮なきゅうりとトマトは、二つの大ざらにもつてあります。そのそばには黄いろいどろしたものがこぼちにいれてあります。一同で、くに子さんにおめでとうをいいました。くに子さんも、うれしそうに、ありがとうございます、と答えました。

三郎君は五目ごはんからたべようと思つて、すみ子さんの方を見ましたら、すみさんはおいしい物のわんを取りあげたところでした。ああ、そうそうと思つて、三郎君もおいしい物をいただきました。ねぎと小さなおだんごがはいっていました。なんとなくあそ味があつておいしいおつゆでした。おだんごはちよつとかまぼこのような味がしました。三郎君が何でつくつたのかしらと思つていますと、おねえさんが笑いながら、「三郎さ

ん、それ、何だか知つていて？」といわれたのでびっくりしました。いわしでつくつたものだときいて、もう一度びっくりしました。三郎君は、いわしというものはあまりおいしくない、とばかり思つていたからです。「ええ、いわしですか。」というとき、三郎君がいわしをあまりすかないことを知つているおねえさんは、「その焼きたてのいわしをたべてみてくださいよ。」といわれました。頭も骨もとつて、身をひらいてつけ焼きにしたそのいわしは、おいしそうな香がしています。一つとつてたべると、かば焼きのよくな味がしてたいへんおいしいのです。めざしやだいこんとにつけたいわしになれて、三郎君は、いわしのおいしさを知るよいおりにぶつかつたわけです。おねえさんは、「そのいわしはけさ町から賣りにきたのを買ったのですが、あとはみんな家をつくつたものや、前からとつておいたものだけです。ああ、そうそう、三郎さんのお家からいただいたものや、配給のものもあります。」といわれました。五目ごはんには、にんじん・ごぼう・いんげんのほかに、いもがらや、しいたけがはいつていて、のりがかけてありました。おにさんは、「なかなかよくできたじゃないか。」と笑いながら、たべ

ていられます。「三郎君たちおかわりをしなさいよ。」といつてくださいましたので、三郎君と進君は、五目ごはんを軽くかえてもらいました。すみ子さんたちは、もう野菜をいただいています。五目ごはんのおさらに、トマトやきゅうりをのせて、黄いろいものをかけておいしそうにたべています。三郎君は先ほどから、その黄いろいものが何だかふしぎでしかたがないのです。はる子さんもめずらしいような顔をしています。三郎君もトマトやきゅうりはたべていますが、その黄いろいものだけは見られません。ちよつとたべてみると、野菜サラダと同じような、すばらしくおいしい味がします。うかがうと、家の落花生でつくった落花生油や、卵の黄味や、酢からできているマヨネーズというものだそうです。トマトやきゅうりも、いつもとちがった味がして、たいへんおいしくいただきました。

だれもがきれいにちよつとをたべてしまったので、あとかたづけも手がります。食器類はたちまちのうちにさげてしまいました。そしてお茶をいただきながら、おねえさんたちと話しました。おねえさんは赤ちゃんにお乳をのませながら、きょうのお料理の話

をしてくださいました。にいさんふたりは台所で話しながら、火をもしていられれます。

姉「くにちゃんのお誕生日は、ずいぶんいい時ね。畑にはいろいろな野菜があるし、海

でもいろんな魚がとれるから、お料理をつくるのもらくだわ。」

くに子「でもきょうは、おねえさん、たいへんだったでしょう。」

姉「いいえ、いそがしいだけで、材料に苦労しないからたいそうらくなのよ。」

はる子「あんなにいろいろのものが使つてあつたけれど、みんなとおいたのですか。」

姉「家では、ふだん、材料をあまり使わずに、物日やみんなの誕生日や、お客様のいらっしゃるついでに時の用意にとつておくのですよ。」

進「だれの誕生日がいちばんわるいでしょうか。」

姉「さあ、材料にいちばん困るのは、四月ごろかもしれませんね。いけておいたたいこんやにんじんやごぼうももうなくなっていますし、お葉類も花が咲いてしまうし、春まいたものはまだ使えないし、お魚でも配給されなかつたらほんとうにしかたがありません。どこの家でも、そういう時のために、干し魚や、つけ物や、切りぼしや、こ

んぶや、いろいろの食糧を貯蔵しておきます。だから、そういう時のごちそうは、今ごろのとはまほじようすがちがいます。」

すみ子「東京などでは、このごろでも、なかなか野菜や魚が手にはいらなくて困るそうです。それでの家でも、貯蔵できる食物はなるべく少しづつ使つてながくもたせようになっている。」とおとうさんがいつていました。」

姉「ほんとにねえ。ここの東京のおねえさんなども、ずいぶん苦労していらつしやるようです。輸送や配給が思うようにいかないからですが、困つたことです。それを使うと、このへんはまったくありがたいことです。」

進「船でも野菜や魚には、ずいぶん不自由するといひます。」

三郎「しかし、大きな船には冷蔵庫があつて、たくさん野菜や魚や肉を積みこんでいる上に、かんづめを使うので、なかなかごちそうがつくれるという話だよ。」

すみ子「船ではどうしてもたいくつするので、旅客をなぐさめるためによいごちそうをつくるのだときいたことがあります。」

姉「いなかの生活もうっかりすると変化にとほしくなつて、楽しみが少なくなりますから、みんなでくふうをしあつてごちそうをつくつたり、それを近所に分けたりするのは、たいせつなことだと思います。しかしいなかの生活は非常にいそがしくて、なかなかお料理をつくるひまがないのがふつうです。だから家じゅうのものが力をあわせて、ひまをつくるのがだいじなのです。」

すみ子「おとうさんのお話では、いなかの人たちは、食事の量が多いわりに種類にくふうが少ないので、子どもなども案外に抵抗力が弱いことがあるといひことです。それでもこの村などは海岸に近いために、しぜん、魚を食べることが多いのでよいそうです。ただ時々、肉はすきでも魚はきらいという子があつたり、病氣になつても牛乳をのまない子があつたりするのは、困つたことだといひていました。」

姉「だから、いなかではお料理にくふうをすることがたいせつなのです。それといひしよに、みんながなるべくすききらいをいわないで、じようになる食物を研究してたべることが必要なのです。しかし、昔どくらべるとたいへん進歩してきたものです。疎

開してきた町の人たちから、教えていただいたことも多いと思います。」

進「さつきい、わたしたひまをつくるのには、どうすればよいのでしょうか。家のおかあさんなど、朝から晩まで、せわしくてせわしくてしかたがないといっています。」

姉「上田さんのお家は、人数が多いし、お家も広いから、食事のことでも、せんとくでもそうじでも、ずいぶんたいへんなですね。ましてお年寄もいらつしやいますから、いろいろ御用事が多くなるでしょう。上田さんが、おそうじをしてあげたり、着物をよごしたりやぶいたりしないようにすれば、それだけおかあさんの手があくわけでしょう。上田さんのおねえさんも、妹さんも、弟さんも、みんながそろつてそういうふうになれば、おかあさんが時にはごちそうをおつくりになるひまもできるというものです。しかし私たちの生活にひまをつくるのは、なかなかの大事業です。おや、おにいさんが呼んでいらつしやいますから……」

おねえさんとかわつて、ふたりのおにいさんが話のなかまにおはいりになりました。

兄「みんな、なかなかおもしろそうな話をしていたね。ひまをつくつてどうしようとい

うのかい。」

進「おかあさんにごちそうをつくつてもらうのです。」

兄「ハハ、それもいいね。だが、ひまの入用なわけはほかにもあるよ。」

はる子「お裁縫をしたり、ラジオをさいたり……」

兄「そう、そういうこともあるね。ひまはまずく使つと、人間をだめにしてしまうが、

また仕事にばかり追われていてひまをつくらないと、自分のしてきたことを考えてみたり、これからの計画を立てたりすることができないばかりか、だんだん考えのせまい、かたよつた人間になつてしまふだろう。そして自分の家や自分の村、ひいては自分たちの國や世の中をよくしていくくふうや仕事もできなくなつてしまふのだ。ではひまをつくるためのくふうはというと、ずいぶんたくさんあるよ。にいさんのような百姓仕事でも、第一に計画をきちんと立てること、そして仕事におくれないこと、第二に仕事のやりかたをくふうすること、ことに農具や農業機械、それに家畜の力をうまく利用すること、第三に家じゆうのものが心をあわせて働くこと、第四に

農業会から肥料をもらったり、生産した物を送り出したりする仕事ですらといて、ことなど、どれもみなたいせつだ。おねえさんの仕事にしても、一日じゅうの仕事がくるいなくはかどること、家じゅうのものが氣をそろえて、いつしよに起きたり、食事をしたり、そうじをしたり、入浴したりすること、食糧その他の配給が規則的にすらすらはこぶことが非常にたいせつなのだ。しかしこのごろでは、配給はなかなか手数がかるし、女の仕事は天氣やお客様のつごうでくるうことが多いので、むやみにいそがしくなってくる。家ではみながみな氣をそろえてくらすことができるので、その点はいいが、それでも赤ちゃんのことがはいってきただけ、ねえさんのひまが少なくなってきた。ましてふつうの家では、年よりや子ども、學校にいく生徒たちのつごうで御飯が二度になったり、そうじが一度にやれなかつたりするので、家などとは比較にならないほど仕事のでまがかつている。だから、今いったようなことに氣をくばるほかに、仕事のしかたにいろいろなくふうをすることや、家の設備を能率的にする必要が大いにあるのだ。すみ子さんのお家など、りっぱなお手本だと思ってい

る。家でも台所の窓を大きくしたり、水がめの場所をかえたり、流しを廣くしたり、かまどを土間からあげて流しに近くしたりして、勝手仕事も明かるく衛生的で、能率のあがるようにくふうをしているわけだ。赤ん坊をあんな妙なベツドに入れておくのも、一つはなるべく手のかからない子どもに育てるためだが、また一つには衛生を考えた点もあるのだよ。

ぼくたちの祖先も、たしかにいろいろとくふうをしてきている。たとえば、お祭や物日のきめかた、その時のごちそう、季節季節の料理、村のいろいろなしきたり、火災や不時の災難の予防法、家の構造や屋敷のかまえ、また赤ん坊の育てかたなどに生活によくあう苦心がはらわれている。しかし時代が進むにつれて、いなかの生活も昔とはずつとかわつてきて、昔の人のくふうもはじめの精神が失われ、ただ古い習慣となつてしまったものが少なくない。迷信や偏見とむすびついて、かえって害をおよぼしているようなものさえある。とくにわるい方の例ではないが、家のへやの使いかたでも客間をいちばんよい所にして、一家のものがね起きる所は日のあたらないへや

にしてみたり、土地によつては晝間もね床をしきはなしの所があったり、保健とか衛生の面からいうとずいぶん無考えのことがある。昔からのよい風習はほとんどこんわれていくのに、かえつて悪いしきたりがはばをきかせていることが多いのだ。

村の生活をもつと明かるい力強いものにしていくということは、なかなか容易ではない。今いったような、昔からのしきたりの勢力が強い上に、土地の自然のもつていゝる力もなかなか強い。土地の産物や産業は自然との関係であまりかわつていかないから、生活も思うように進歩していかないということになりがちだ。寒い地方とか、山の地方とかでは、とくにそういうことがいえると思う。この村などは自然にめぐまれているといつていいのだが、それでも東京との交通は不便なほうだし、水道や電気などは、よほどくふうしなければうまくいかない。むずかしいからぎりぎりまで見あわせておこうということになつてしまう。となりの磯村には水道があるのに、この村にないのば、きみたちもふしぎに思つたことだろう。」

おにいさんはなかなか話に熱がはいつて、それからそれへと話しつづけられました

が、さすがに新聞の係だけあつて、みんないつしょうけんめいにきき入っていました。

この時おねえさんが台所から出てきて、おにいさんをよばれたので、しばらく話がとぎれました。

まもなくおにいさんたちは、大きなおさらにおまんじゅうを山のようにもりあげてはこんでいらつしました。

姉「これは、おにいさんがみなさんにごちそうしようというので、きのうの朝から用意してつくつたシナまんじゅうです。なかには何もはいつていませんから、このクリームをつけておあがりなさい。こちらの野菜といつしよにたべてもおいしいかもしれませんよ。」

はる子さんは、このおまんじゅうがふつうのおまんじゅうやパンとちがつて、たいそうふうわりとできているのをふしぎに思いました。クリームはあまくておいしい、たまなと青じその塩もみも、あつさりしておいしいので、たくさんいただきました。

兄「これは、つくるのに少してまがかかるとは、なかなかかわつていゝるだろう。に

いさんが中國の人からならってきたんだよ。じゅうそうがほんの少しいるだけで、ふくらじ粉やじゅうそうでふくらませたんじやないよ。たくさんたべてもらおうと思って、このとおりどつさりつくつたから、えんりょなくおありが。」

はる子さんやすみ子さんは、おねえさんからこのおまんじゅうやクリームのつくりかたを教えていただきました。

それからあとはみんなでいろいろな遊びをして、おいとましたのは九時近くでした。ちやうど明かるい月がのぼってきて、白い砂の上にくつきりとまつ影がうつつて、美しい夜でした。

次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。

- 1、農家で客をよぶのはどんなときかしらべてみる。
- 2、みんなの誕生日のお祝いのしかたをくらべてみる。
- 3、学級で誕生会をもよおす。
- 4、來客用のふとんや道具類をしらべ、その扱い、保存のしかたをしらべること。

5、必要な栄養素をしらべ、こんだて表をつくってみる。

6、あるきまつた日につくる特別の食物について、一年じゅうの表をつくってみる。

7、さまざまな食物の貯藏法と、その発達の歴史をしらべてみる。

8、自分の家を住みよいものにするくふうを考えてみる。

9、自分たちの生活のしきたりで不便だと思ふこと、わるいと思ふことを、他の人と話しあつてたしかめてみる。

10、自分の住んでいる土地の自然が、どのくらい自分たちの衣食住にえいきょうをあたえているか、考えてみる。

11、ひまをつくることについてくふうをすること。

12、家の人たちにひまをつくつてあげるように努力し、それがどんなふうにかの人の役に立つかしらべてみる。

13、みんなできつしにできる遊びをくふうすること。

五、夏休みの計画

七月になつて急にあつくなりました。お祭りや遠足、田うえなど、楽しみの多かつた一学期もそろそろおわりです。松林のむこうから吹いてくる海風が、なんとなく楽しい心をさそうような気がします。十日からは、午後の授業がなくなりました。きのうの午斤、三郎君の学級では、夏休みちゅうの生活を中心にして自治会がひらかれ、次のようなことがまりました。

- 一、できるだけ家の手つだいをする事。
- 二、水およびは必ず二、三人いっしょに、危険のない場所をえらんですること。
- 三、毎朝、涼しいうちに自分のすきな勉強をすること。
- 四、学級の農園の手入れは、各はん交代ですること。
- 五、自分の家の役に立つような道具や設備をつくること。(家の人から頼まれないものでも、役に立つものを考える。)

六、自分の家の職業についてくわしくしらべること。

七、村の問題について、考えをまとめておくこと。

八、旅行をする人は、なるべく写生をしたり、絵はがきや標本を集めたりしてくること。

六番と七番については、だいたい意見が出たのですが、学期のはじめにきめた学級の標語に照らして、できるだけやつた結果をまとめ、本にしてみようということになりました。農業をやっている家が多いので、その家の人たちは、自分の家の特別な作物や副業についてしらべてもよいこと、また何人が組んでやつてもよいことにまりました。七番は六番を研究した結果、必要を感じた人たちだけでよいことになり、五番の結果は学級新聞に発表することになりました。学級新聞は十日ごとに発行する予定です。

進君の家は、部落の中でもいちばん手びろく農業をやつていて、米も麦もさつまいもも野菜もつくつていますが、それらはどれも他の家と同じなので、進君は種まゆの製造のことをしらべることにしました。進君の家では長野縣の会社ととりきめをして、春、種まゆをつくるのです。村にはほかにも種まゆをつくる家がありますが、みな進君の家

でまとめて世話をしているのです。

養蚕はわが國の將來のためにきわめて重要な産業です。戦争中、アメリカではナイロンという人造せんいができて絹の競争相手になり、現在でもくつ下などでは絹の方がおされているそうですが、食糧や石油、木材等の見返り物資として、生糸や絹はいちばんだいいじなものです。その生糸の原料となるまゆは、全国各地の農家でつくられています。

養蚕はわが國の農家でもっとも廣く行われているだいいじな副業です。ことに山の地方では、副業というより、むしろ主要な仕事になっています。賣るほど米や麦がとれる農家や、畑作物を賣つて金にかえることのできる農家はよいのですが、自分の家でたべるだけの穀類や野菜しかつくる土地をもたないわが國の多くの農家、ことに山の地方の農家では、養蚕とか炭焼きとかはたいせつな現金のはいる道になります。戦争以來ようすがかわつてきましたが、現金をとるためには、養蚕や炭焼きなどの副業にたよるほかのないうちでも養蚕は、わが國では昔から、どうしても農家と切りはなせないものでした。

よい生糸を多くとるには、よい蚕の種をえらぶことが第一です。だからその種紙をつくるのは非常にたいせつな仕事です。研究が進むにつれて、種をとる蚕は、まゆをとる蚕とは別にして、特別に飼つた方がよいことがわかり、そのためとくにそれに適した土地をえらんでやるようになりました。進君のおとうさんは、このあたりの氣候が溫暖なのと、村に山くわの豊富なこと、きょうそなどという蚕の敵の少ないことなどを考えた上で、長野縣の会社と相談して、十数年前からこの種まゆの製造をこころみられたのです。はたして進君のおとうさんのお考え通り、よい種まゆがとれるので、現在では縣下はもちろんのこと、長野・群馬、その他の養蚕地方から頼まれて種まゆをつくるようになりました。進君はおとうさんにきいて、このことをくわしくしらべようと思いました。はる子さんは養鶏のことを、すみ子さんはお医者のことを、くに子さんは、野菜の促成さいばいのことをしらべるそうです。三郎君も乳牛飼育の副業のことを研究するといっています。

進君の手つたいは、畑の草とりです。ことしはおとうさんをびつくりさせようと意氣

こんでいます。三郎君は毎日の牛乳運搬のほかに、牛にやる草刈りをするつもりです。もちろん畑の草とりもします。はる子さんも進君と同じですが、台所のお手つだいもしたいといっています。すみ子さんは進君を手つだつて、草とりをするそうです。くに子さんは草とりもしますが、赤ちゃんの着物をぬわしてもらえると楽しみにしています。それから、せんたくも手つだうといっています。

村の問題については、三郎君と進君は相談の結果、まず上の山のにいさんの所へ行って、話をきくことにしました。上の山のにいさんは、町の銀行に勤めていられるので、三郎君からつこうをきいておたずねすることにしました。

夏休みにはいつてさいしょの土曜日の午後です。三郎君と進君とは、上の山のにいさんの家をおたずねしました。にいさんは銀行から帰つて、ひととき入れられたところでした。

兄「村の問題をしらべつて、どういうわけなのかい。」

三郎「ぼくたちは、この夏休みに、自分の家の職業がどのくらい村や世の中の人の役に立っているか、またどんなに村の人々や他の職業の人たちのおかげを受けているか、それからぼくたちは家の職業にどんな手つだいができるか、ということの研究しようときめたのです。しかし、村の役に立つということは、すぐわかるようでいて、考えるとはつきりしないのです。先生は、これには村の問題ということを考えてみる必要があるといわれましたが、きょうはその村の問題ということをやりたいのです。」

兄「ほう、なかなかえらいことを勉強するんだね。じゃあきくが、きみたちの知っている村の問題といつたら、どんなものがあるのかい。」

三郎「それがぼくたちにははつきりとわからないのですが、村から、はいやかやのみを追いはらうことなども問題ではないのですか。また疎開の人たちや非農家の人に野菜などを配給してあげることや、戦災者や引揚者を助けてあげることなども問題ではないのですか。食糧の供出とか肥料やじかたびなどの配給も問題なのでしょう。」

兄「なんだ、なかなかよく知っているではないか。それはみんな村の重要な問題だよ。」

つまり、村の人たち全部が、なかよく助けあつて、少しでもよい生活のできるようにしていききたいと思うとき、そのじやまになること、たとえば、はいやかがいて傳染病をひろげるとか、農家では不自由しないばかりか、遠くの土地まで野菜を賣り出したりするのにな、非農家や疎開の人たちが野菜に困るとか、供出のわりあてが公平にいかないとか、非常に困っている家にじかたびがあたらないとか、そういうた困つたことがらをどう解決すればいいかというところに、村の問題があるというわけだ。」

進「小作の人たちに土地を分ける問題や、村に工場をつくる問題、副業をさかんにする問題などもあるように書いていますが……」

兄「そうだ。それらの問題は、困つたことから解決するためというよりは一歩進んで、村全体がなかよくして少しでもみんなの生活をよくしていくために、こうしたらどうかと考えるときにおこってくる問題なのだ。たとえば、なるべく小作の人を自作にさせることとか、食料品に加工する工場や、その他の工場をつくつて新しい産業をおこすこととか、副業として養蚕をさかんにしたり、にわとりとかぶたとか乳牛とかを飼

うこととか、そういうのぞましいことをじつさいにやるためにはどうすればいいかということもまた、村のたいせつな問題になつてくる。」

三郎「つまり、村全体の生活をよくするのにさまたげとなつていることをとりのぞいたり、つごうのよいことをはじめていこうとしたりすると、村の問題があるわけなのですな。」

兄「そうだ。だから、きみたちが家業のことをしらべていつて、村としてはこうでないと困るとか、こうした方がいいとか、そんなふうに考えることにつきあたれば、そこに村の問題が出てくることになる。たとえば、三郎君が乳牛を飼う仕事を研究していつて、乳牛を飼っている家には、飼料となるふすまや塩をもつと配給してもらわないと、村では乳牛を飼えなくなつてしまふということがわかつたとする。そうすると、牛の飼料や塩の配給ということが、村の問題の一つになつてくるわけだ。少しむづかしくなるかもしれないが、さつき進君のいつた副業の話でも同じことだ。今は農村は景氣がいけれども、これはそういつまでもつづかないかもしれない――また

現在のように臨時の仕事があつて、人手がそちらへまわつていくということも、長つづきするとはかぎらない。そうすると、どうしても將來のことを考えた上で、よく土地にあつた確実な副業をはじめておく必要がある。村としては、そこにもたいせつな問題が出てきているわけだ。」

進「そうすると、はいやかをなくすことは、それほど大きな問題ではないのですか。」

兄「そうだね。ちよつと考えると大きな問題ではないようにみえるかもしれないが、なかなかそうじゃないんだよ。村全体の人が結びあつて、もつとよい生活をしていくこうとすると、今いつた職業とか経済とかの問題がまず第一に考えられはするが、みんなが健康で楽しい生活をするということも、やはり同じようにたいせつなのだ。むしろこの方が手つとり早い問題かもしれない。はいやかを飼つておいたつて、別に何のたしにもならないのだからね。はいのためには傳染病がはやつて、おたがいむだな費用を使つたり、いのちをうばわれたり、またかのために毎晩苦しい思いをしたりするのは、あまりほめた話ではないね。それも、はいやかはどうしてもなくせないというな

らとにかく、みんなで心をあわせて骨を折れば、十分たいじできるのだからね。」

三郎「そのほかには、どんな問題があるでしょうが」

兄「それは、君たちがみつけるのがいいと思うが、たとえば、村の人たちの職業や経済にすぐむすびついているものには、農業会でトラックを買い入れる問題がある。村でできる草花や、そら豆、促成野菜を東京方面に送り出すのに、いちいちとなり町の運送業者にたのんだり、鉄道を使つたりしていたのでは、おそくもなるし利益もへるからだ。こういった運輸や交通通信に關係した問題はまたほかにもあるだろう。また六・三・三制の実施にともなつて、小学校や中学校の校舎をどうするかというような教育の問題もある。君たちが勉強するのに学校にもつと本があつたらいいと思い、それを先生がたにおねがいすれば、それも村の問題になつてくるわけだ。小さい子どもたちだつて村民の一人なんだからね。」

三郎「村の問題つて、ばくたちにもすぐ關係があるものもあるのですね。」

兄「そうだ。君たちが、もしわるい遊びにふけつたりすれば、それも村の問題になつて

くるわけだ。村の人たちの考えかたを、もつと深みのあるものにするとか、みんなに人間のほんとうの楽しみを味わわせることとかも大きな問題だ。進君のおとうさんのおつしやるように、村の人一人一人の収入が増したといつても、それがつまらない楽しみのためにむだに使われてしまつてはなんにもならない。ましてくらしがらくになつたということが、人にしんせつをつくすゆとりをつくるどころか、損得のことばかりを考えようとするきつかけになつてしまうのでは、かえつてなさない。青年会でやっているいろいろな仕事も、この問題に関係しているものが多い。」

兄「そして、そういった問題は、どれも、君たちのしらべようとする家業のことと、すぐ結びついているのだ。衛生のこととか、教育のこととか、楽しみを味わうこととか、人々の考えかたのこととかだつて、みなそうなのだ。

もともと職業というものが、生活とは切つても切れないものだ。健全な生活ができなければ、どんな職業だつてりつぱにやりとおすことはできない。それに職業のうち

には、お医者さんとか役場の人とか先生がたとかのように、保健衛生や人々の心がけのことに直接かわりのあるものもある。杉山君などは、ああして朝から晩まで、人からなんとかいわれるくらい、農業にせいを出して働いているけれど、金をためるのを目的にしているのではない。明かるい農家の生活を自分たちできずいてみようという強い熱意でいっぱいなんだ。つまらない交際におかねは使われないけれど、よい本はどんどん買って読むし、青年会の費用などはずいぶん出しているんだ。いつもひまをおしんでいるようにみえるが、あれでゆつくりする時には、また思ひきつて楽しそうに時間を使っている。ぼくは、そのうちきつと、ああいう生活のしかたにみんながびきつつけられるようになると思つている。」

三郎「このあいだくに子さんの誕生祝いに、ぼくたちもおにいさんからおまんじゅうをごちそうになりました。」

兄「おお、そうか、それはおいしかったらう。誕生祝いにあつまるのはいいね。それでおもしろい話でもあつたかい。」

進「農村の生活をよくしていくには、自然のいろいろな条件と、昔からのわるい風習と、がじゃまをする。これにうちかつには、家じゅうのものが力をあわせることと、くふうをすることとが必要だ。というような話で、ひまの入用なこと、ひまのつくりかたなど、にいさんやねえさんとみんなで話しあいました。」

兄「それはよかつた。じつさい、ぼくたちの生活のよいところはすぐずれるくせに、わるいところはなかなかおらないのだからね。ほんとうに心をあわせて、努力する必要があるんだ。」

進「くに子さんのおにいさんも、そういつていましたよ。」

三郎「それでは村のいろいろな問題は、どうしたらいちばんうまく解決できるのでしょうか。たとえば、方々の家で乳牛の飼料や塩の配給を増してもらうには……」

兄「まずその飼料や塩のことをくわしくしらべるんだね。現在この村で使っている飼料ばかりでなく、昔使っていた飼料や、他の土地で使っている飼料についてもよくしらべ、いちばん適當なもの、どうしてもなくてはいけないものを考えて、その種類や分

量をはつきりさせる。そしてそれらのいちいちについて、手に入れた、手にはいる分量などをしらべあげる。ことにぜひ配給を心配してもらわなければならないものについて、その生産地や配給のみちすじから、その値段とか品質にいたるまでくわしくしらべなければならぬ。そして、こういうふうにすれば手にはいるという目安がついたら、だんだんにはかの人たちにもその話をしてきかせるのだ。そうすると、はじめの考えがいろいろとたしかめられ改められて、みんなの意見がまとまるようになる。そこまですればもうしめたものだ。それは部落会でも話にでるし、農事実行組合、乳牛組合でも話しあわれ、さいごには、村会や村役場、はては農業会とか、牛乳の集荷や販賣にあだつている組合や業者まで動かすようになってくる。もちろんそれまでにはいろいろな困難があつて、そう急には飼料や塩が配給されるようにはならないかもしれないけれど、みんなの考えが正しく、それに力をあわせて努力しあえば、必ず問題は解決されるだろう。つまり正しい意見はしだいにみんなの意見となり、みんなの意見となれば、それはきまつて実現されてくるというわけだ。もちろんそういう正しい

い意見の生まれてくるまで、またみんなの意見が一致してくるまで、それが実現されるまでのすじみちは、問題によつて一様ではない。それはやつぱり、きみたちが勉強するにつれてわがてくることだと思ふ。きみたちの学級で、村の道ぶしんを手つたおうとか、展覧会をやるうとか計画する場合でも、よく考えてみると、今いつたようなすじみちがひとりでできていると思ふ。村だつて、学級だつて、問題の出できかたも、解決される方法もまったく同じなのだ。」

かなりこみいったお話でしたが、三郎君たちはいつしうけんめいにきいたので、だいたいわかりました。おにいさんはさらに、次のようにいわれました。

兄「ここでひとつ、つけ加えたいことがある。たとえばきみたちの学級に、おとうさんが御病氣で困つてゐる一人の友だちがあるとす。みんなはむろんなんとかして、そのお友だちを助けて元氣づけたいと思ふだらう。そうなればもうつばな学級の問題だ。それと同じように、村でもある特別の家に、別にそれは貧乏で困つてゐるというわけでもなくともいいのだが、とにかくある一軒の家やある一人のためは、みんなで

何かしてあげたいということになると、やはりそれは村の問題になつてくる。たとえば村に功勞のあつた村長さんにお礼を申しあげたいとか、戦災で困つてゐる家を助けてあげたいとかいうことは、やはり村の問題と考えていい。そのわけは、ひとつみんなに考えておいてもらいたいね。要するに村の問題といつても、何か特別のものがあつて、よく考える必要はないんだよ。村の人たち全部の生活がもつとよくなるように、牛がよく乳を出してくれるように、作物がよくみのるように、村に病人がでないようにと考へてみて、それにはどうしたらよいだらうかというのが村の問題というわけだ。さあ、だいぶ涼しくなつてきたから、畑をみまわりながら散歩してこよう。わからなないことは、歩きながらたずねたまえ。」

三人は畑の方へ歩いていきました。畑にはトマトやきゅうりが今をさかりとなつていました。三郎君たちがいていねいにお礼をいつておにいさんとお別れしたのは、それから三十分ぐらいあつた。三郎君たちは、なんだか急に考へがひらけたような氣がしてきました。田や畑で働いてゐる人たちや、作物や、通りすがりの家々のことが、そのま

ま村の問題なんだ、と思うと、たのもしいうな、また心のひきしまるような気がしてゆかいでした。

次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。

- 1、夏休みの計画を立てること。
- 2、養蚕のことをしらべてみる。
- 3、山の地方の産業についてしらべてみる。
- 4、とくに山の森林を中心とする産業についてしらべてみる。
- 5、生糸と人造せんの長短をくらべてみる。
- 6、夏休みの間の家事の手つだいのしかたをくふうすること。
- 7、農村・山村・漁村に分けて、そこで行われている副業をしらべてみる。
- 8、家業の種類や、他の職業との関係をしらべてみる。
- 9、村にある工場を見学して、原料のくる土地や製品を出す土地のことをしらべてみる。
- 10、傳染病の予防の施設をしらべてみる。
- 11、村の人たちの楽しみと、そのための施設をしらべてみる。
- 12、自分の村では今どんなことがいちばん問題になっているか、それはどんなに解決されるかを考えてみる。
- 13、市町村の政治をする機関についてしらべてみる。

六、夕御飯のあと

八月もなかばを過ぎると、もう暑さも峠をこしたようです。進君の家では、あけはなした涼しい座敷で、楽しい夕御飯がはじまっています。夕日はまだえんがわのガラス戸にさして、ひさしの下にのぞいている空のうろこ雲が、もも色にそまつて光っているのがたいそうきれいです。進君がからだをずらしてみますと、太陽は低い峰つづきの西の山にまだ半分かかっていた。進君は夏休みの少し前から、夕日がちょうどあの山に落ちてしまう時刻を、たんねんに書きつけています。少しずつ沈む位置がずれていくのや、しだいに日あしが短くなっていくのがわかって興味があります。

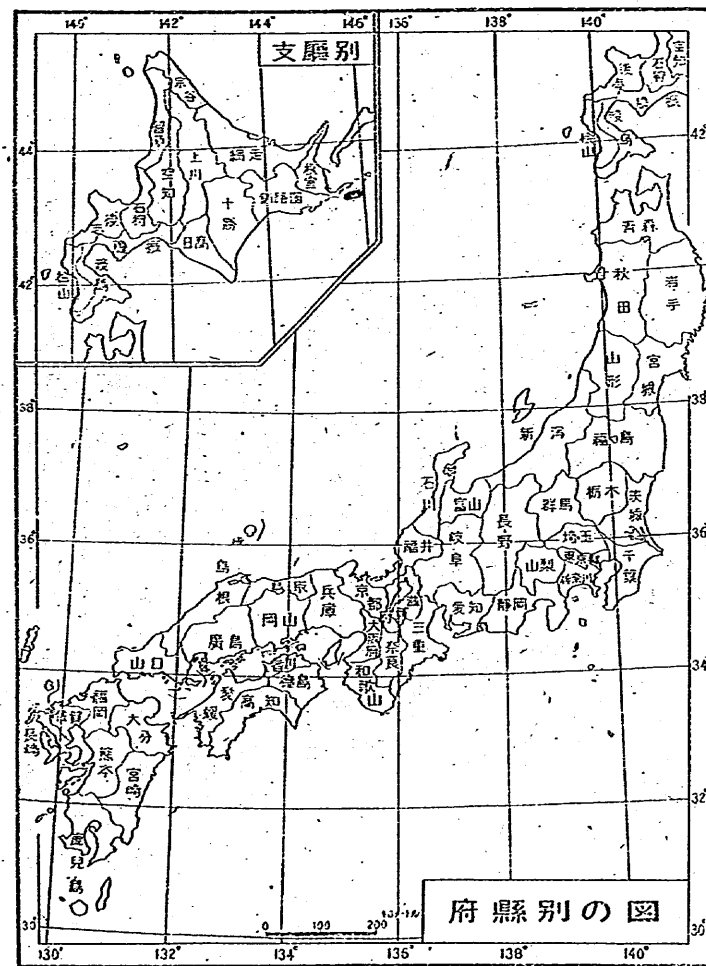
にぎやかな食事がすみ、みんながお茶を飲みだすころになると、いつもラジオの英語会話がはじまります。この時間には、進君の家では一家そろって勉強をすることになっています。進君もはじめはとてついてもついていけないと思っただけでしたが、このごろになつて、さいしょとくらべてみると、自分ながらそうとう進んだことがわかります。毎日毎

日かかさずきいていたのが役に立つたでしょう。このへんではめつたに外國の人にも
会わず、残念ながらまだ実地にためす機会がありません。しかし進君にとつては、英語
を使つてみることで、英語と日本語のちがいを考えてみることに興味がありました。
もちろん外國のことばをおぼえるのはたいせつなことです。けれども私たちのふ
だん使うことばについても、みんな一度話しあつてみるのがおもしろいではありません
か。ことばには通じるようで通じないところがあります。ときには、どうしたらいい
ばんよくわかつてもらえるか、ということを考えてながら話してみる必要があるでしょ
う。ラジオのできたことは、遠くはなれた人たちのことばや考えを、どんなに通じやす
くしたことでしょうか。しらべてみますと、進君の学級では、ラジオのある家は三分の
一にたりません。ためになるよい放送だけでもいつしよにきけたらと、進君や三郎君は
だいぶ前から頭をひねっています。

七時のニュースがはじまると、進君は立ちあがつて郵便さしからきょうの郵便物をと
つてきました。郵便のかかりは進君です。今晚はおとうさんのところへ手紙が三通、お

かあさんとねえさんへ葉書が一枚ずつです。郵便物には消し印があるので、何日かか
つて届いたかということがたいいわかります。進君はさいしょ、ふとしたことから、差
し出された土地と、着くまでの時間とをくらべることに興味をもちだしたのですが、こ
のころでは、そのために特別のノートをつくつて記入するようになりました。そのなか
には、記録のページと、かかった時間の表と、日本地図とがつくられています。遠いと
ころからくるものなど、時にはふだんの二倍もかかつてくることがあります。原因をし
らべることのできないのは残念ですが、ラジオで大水や大雪などのニュースが放送され
たりして、なるほどと思ひあたることもあります。おとうさんのところへは、お仕事の
関係で、ずいぶん方々の府縣から手紙がきますので、進君はもうどこからくるのでも、
いく日ぐらいいかるものか、おおよそのけんとうがつくようになりました。おとうさん
もなかなか便利だといつて、よくたずねられるようになりました。

進君はだんだん通信のことがおもしろくなつてきました。それで、上の山のいさん
から本を借りて、大昔からの通信の話や、発達の歴史を読んだりしました。近ごろは郵



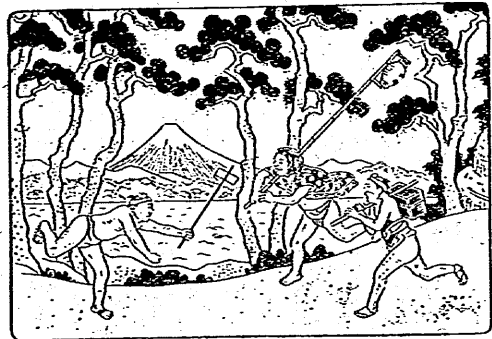
便がおそくなつたといわれますが、昔にくらべれば、まだまだ問題にならない速さです。通信の方法は交通機関の発達によつて、しだいに進んできたといえます。しかし必ずしも交通機関ばかりでなく、電信電話やラジオが発明されたので、船や車のかよわない所でもすぐ話しあうことができるようになってきました。世の中のできごとを知るために、いま私たちのいちばん手近にあるのは新聞です。三郎君は明治時代の新聞の写真を見たことがあります。ことばもむずかしいし、印刷もあまり美しくありません。新聞は発行部数や内容からいっても、わずかの間にたいへん進歩をしたものです。しかし、最近ほとくにラジオがずいぶんひろがってきました。世界のほてで起つたことが、すぐ私たちの耳にはいります。そればかりでなく、実況放送などでは、遠くのことを同時に知ることができます。いまにもつとつと便利なものが出てくることでしょう。

進君は郵便を手はじめにして、だんだん考えをすすめるうちに、郵便や電信電話や新聞やラジオが、どんなことに役立つているかという問題にまではいつていきました。新聞やラジオは、ただ新しいことをしらせているだけではありません。おもしろいお話の

記事もあれば、美しい音楽の放送もあります。進君のおかあさんは放送劇がすきで、いつもその番組を楽しみにしていられます。弟の誠君は、野球の放送となるとむちゅうです。だから新聞やラジオは、私たちに楽しい時間をあたえるという働きもっているわけです。

進君は新聞とラジオの役目として二つのことを考えました。私たちに新しいできごとを知らせてくれることが一つで、私たちを楽しませてくれることがもう一つです。ほかには役目はないでしょうか。進君はいく日も考えつかないでいましたが、そのうち「英語会話」の時間を思い出したので、第三の役目に気がつきました。新聞やラジオは私たちを教育してくれます。私たちは新聞でりっぱな意見を讀んだり、有益な記事を見たりします。ラジオでも外国語を勉強したり、ためになるお話をきいたりします。これから学校での勉強のほかに、新聞やラジオなどが大きな手助けをしてくれることでしょう。進君は今までだいたいのこの三つの働きを発見したので、こんやはそのことをおかあさんやおねえさんに話してみようと思っていました。ちやうど夕飯の片づけが早くすんだ

ので、おかあさんやおねえさんも裁縫をしながら進君の考えをきいてくださいました。そしてそのおかげで、ラジオにはまだまだいろいろな働きのあることがわかりました。



たとえば天気予報のようなものも、ずいぶん役に立ちます。都会でももちろん役立ちますが、農村と漁村ではとくに大きな働きをもっているといえます。またラジオがひろがってからは、村でもたいへん時間が守られるようになってきました。これは目立たないようでも大きなことです。新聞やラジオの大きな役目はだいたいはじめの三つと考えられるのですが、天気予報や時間の励行のような働きは、まだほかにもたくさんありそうです。進君はいつかそれを表にしてみたいと考えています。

進君はその夜、床にはいると、このように通信の発達した時代に生まれてきたありがたさをしみみ考えました。しかし新聞やラジオが十分に力を出すためには、どれだけ

たくさんの方の努力があることでしょう。こんな夜おそくにも電信を打ったり、電話をかけたり、印刷をしたり、記事を書いたりしている人たちがたくさんあるはずですよ。またこれだけに発達するまでには、どれだけ多くの人の苦心が積み重ねられてきたことでしょうか。そう思うと、進君は、こうしてゆつくりとねているのが申しわけないような気さえしました。あれこれと考えてみると、通信の方法の発達しなかった昔はどんな生活だったろうか、という疑問もわいてきました。今から考えてみればたいへんな不便ですが、そのころの人たちはたいして不自由にも思わなかったかもしれせん。とにかく進君は、昔のことでもぜひ知っておきたいと思いました。

次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょうか。

- 1、話しあいのときなどに、自分の考えをよくわかるように人につたえるにはどうすればよいのか、考えてみる。
- 2、読書ノートをつくる。
- 3、通信のための施設や機関についてしらべる。

七、町からの手紙

夏休みもいつのまにか過ぎて、第二学期がはじまりました。

きょうは学級委員の改選が行われました。三郎君もくに子さんも学級委員になり、級長の山本君もこの学期は学級委員として働くことになりました。新聞の係も、三郎君、くに子さん、はる子さんのかわりに、新しい人たちが三人はいました。はる子さんはこんどは鶏舎係になりました。大部分の人が新しい仕事を受けもって、気分も新しくなつたようです。

学級委員は、さつそくこの学期の仕事の計画を相談しましたが、山本君からもくに子さんからも、学級の標語についていろいろな意見が出てまじりませんでした。先生におうかがいする必要もあるので、結局あしたのさいしょの時間に、みんなにもきいてみようということになりました。

帰途についた三郎君は、縣道をいつものように小川にそって、ぼくりぼくりと歩いて

いきました。きょうはくに子さんたちと別です。学級委員としての仕事を考えると、三郎君の心はなんとはなしにはずんできます。あしたからの学級の生活をどういうふうに進めていこうか。この学期の共同作業には何をえらんだらいいだろうか。そう思うと、三郎君の胸のなには、いろいろな新しい考えが、ちやうど入道雲のようにもくもくとわいてくるのでした。いくてには、白い縣道が、かぎりない希望のようにぐんぐんのびています。むちゅうになつた三郎君は、いつのまにかふだんの悪いくせが出て、くつの先でぼんぼん小石をけていることにもしばらく氣づきませんでした。

家に帰つて自分のへやにはいると、机の上に小包が置いてありました。どつしりと手ごたえのあるぶあつい包みです。裏がえしてみると、神戸のおじさんからでした。おじさんからは、夏休みのはじめに一度お便りがあつたきりです。でも、御本だな、と三郎君はすぐに思いました。ていねいに包みをといてみると、とつぜんの贈物で自分をびつくりさせようとしている、いたずらずきのおじさんの顔がうかんできました。いつも明かるい、しかも思いやりの深いそのおじさんが、三郎君は昔から大すきでした。三郎君

にはその小包をひらくことが、遠くにいるおじさんにはんとうにお会いすることのような氣持がしてきました。急に思いついて、井戸ばたへ走つていくと、三郎君はいきなりつめたい水をくみあげて手や顔を洗い、思うぞんぶんうがいをしました。神戸つてどんなところだろう。ひどく焼けたというがどれくらいに復興しているだろう。おじさんにはもういいお家がみつつかつたかしら。三郎君の頭のなかでは、いつかのおじさんのお話ぐるぐるかけめぐっていました。

おじさんからいただいた書物のひとつは、子どもたちのためのお話を集めたものでした。三郎君は、おじさんがなぜこの御本を送つてくださったか、よく考えてみたいと思いました。おじさんは去年の夏、いろいろ御苦労をなさつて、海のむこうの中國から帰つてこられたのです。一年前、歸國してすぐたずねてくださったとき、おじさんはたいへんやつれていました。でも半月ばかり家で疲れをお休めになつた間に、おじさんは外地の珍しいありさまや人情について、いろいろためになるお話をしてくださいました。三郎君がことに心をひかれたのは、戦争がおわつてから、むこうにいた人たちが、

どんなに力をあわせて困苦にうちかつたか、また中國の人たちのなかに、どんなにたたかい心の持主がいたか、というようなことについての美しいものがたりでした。おじさんはたいそうお話もじょうずで、まるで目に見るように話されたので、しまいには、おとうさんやおかあさんまで加わって、夜のふけるのを忘れることもたびたびあったくらいでした。

おじさんのくださったその本には、いちばんはじめに次のような文がのせてあります。

小さい友のために

もうかれこれ七、八年も昔のことでしょうか。ある日、私のところへ、ひょっこり外國から便りが届いたことがあります。うわ書きが見えない横文字なのと、はってあつた切手がめずらしいのとで、小さい娘は大得意で私に届けにきました。見ると、たどたどしいローマ字で、ていねいにおて名が書いてあります。私にはひと目で、それがアンリという少年の手紙であることがわかりました。

アンリ君はそのころ、まだきつと十になつていなかったことでしょう。私とはじめて知りあつた時が、たしか七つか八つでしたから。海のはるかかなたからはこばれてきたこの小さな手紙を、ての

ひらにのせてながめていると、私の胸のなかには遠いヨーロッパの思い出がしずかに流れていきました。私は十年ほど前、勉強のために二年あまりフランスに滞在したことがあります。その間、たいていはパリに住んでいたのですが、時には南フランスのいなかを旅したり、セーヌの流れをさかのぼってみたりしたこともありました。アンリ少年はそのころの小さなお友だちのひとりなのです。

アンリ君は、私の数あるフランスの友のなかでも、いちばん心に残るなつかしい友だちです。しかし、そのころにももう、日本にはふたりの子どもさえあつたおとなの私が、どういうわけでこのような小さい友だちをみつけたのでしょうか。きょう、私は、みなさんにそのお話をきいていただきたいと思います。

ある美しい秋の午後のことでした。私は大使館の友人の自動車にのせてもらつて、パリの郊外へ散歩に出かけたことがあります。郊外といっても、自動車でたつぷり二時間かかるのですから、あたりの景色は、もうすっかりいなくなつてきます。ちょうど友人に用のある村で車をおりると、友人の帰る時刻のくるまで、私はそのあたりをぶらぶら歩いてみることにしました。

空は底の知れないほどすみとおつて、少しすつかたまつて浮かんでいる雲が、くつきりと目にしみるようでした。なだらかな起伏をもった小麦畑の間の白い道の上に、秋の日がいつぱいに降りそそいでいます。左手の方には、あまり遠くないところに、四、五軒の農家が見えて、ゆっくりと太

きな水車がまわっていました。進んでいくにつれて、ゆくてに小さく光っている教会の塔が、だんだんはつきり見えてくるようになります。小川にかけられた橋のところでは、つりをする老人にも出あいました。こんな時、のんびりした牛のなき声をきいたりするのも、なにか楽しいものです。

しかし、めずらしく日差しが強かったので、歩きつづけていた私は、しだいに汗ばむような気がしてきました。それで、とあるくるみの小さな林のなかにはいつてみると、そこは、ちょうど草もあまり深くなくて、腰をおろした感じになんともいえないやわらかみがあるのです。あおむけになつて休んでみると、ほおにふれる草がひやひやとして、夢の國にでもさそわれていくように思われるのでした。

それからどのくらい時がたつたのでしょうか。あまり心持がよいので、いつかうとうとしたものとみえます。低いかん木のしげみを通してきらきらかがやいている太陽は、もうだいぶん西にかたむいているようにも思われます。すつかりつかれのやすまつた私は、大きなのびをしながらからだを起してみました。

すると、やはりこの林のなかに、くるみの葉かげをあみのように全身にうつしながら、ふたりの子どもが、私の方を見て立っているではありませんか。ひとりには十をこしたばかりとみえる小がら

な女の子です。白い質素なうわぎに、えりにさした黄いろい野菊の似あうやさしい顔たちでした。もうひとりには、目のぼつちりしたかしこそうな男の子で、これはひと目で弟だということがわかります。姉は、片手にくりをいっばい入れた小さなかごをさげ、もう一方で弟の手をひいていました。外国人がめずらしいのでしょうか。男の子はなにかいたげに姉を見るのですが、女の子はだまつて私を見つめているばかりです。

「ぼうや、くり拾いかい。」

私がおえみながら口をひらくと、男の子はまた姉にめくばせをして、ちよつとうなずきました。「どう、しばらく、おやすみなさい。」

きょうだいを私のかたわらにすわらせるためには、なおしばらく骨を折らなければなりません。しかし、いったん話を始めると、私たちは、すぐなかよしになりました。二、三十分も話しているうちには、私たちは、もうずつと昔からの友だちのようにうちとけていたのです。きょうだいの家はやはりこの近くの農家で、名まえは、姉をルネ、弟をアンリとよぶこともその時知りました。

「おじさん、日本のお話してよ。」

ルネさんはさすがに日本という國のあることを知っていました。

前に一度、日本の人が村にきたことがあるのだそうです。草の上で話がはすうちにも、ふたりは、ポケットから焼いたくりをとり出して、私にすすめてくれました。また、のどがかわいたといいたすと、ルネさんは、大いそぎで水をとりにいってくれたりもしました。その水のおいしかったことを、私はいまでも忘れません。

しかし、やがてあしのはやい秋の夕やみが、ひたひたとあたりにしのびよってきました。ふりむくと、西の空がまっかにもえています。ふたりは、せひ家に寄れというのでしたが、私はおそくなるのでまたくる日を約束しました。別れる時、アンリ君はせのびして、私のポケットに、いっぱいくりをつめてくれました。

私はそれから、たびたびアンリ君の家をたずねるようになりました。御両親もたいそうまじめな明かるいかたで、いつもあたたかきもてなしを受けました。そのうちアンリ君のきょうだいばかりでなく、そのなかまの村の子どもたちとも、だんだんかがよくなっていきました。みんなで楽しい野遊びをしたこともあります。そんな時、遠いフランスのいなかの子どもたちは、まるで自分が東洋の日本にきてでもいるかのように、耳をすまして私の話にきき入るのです。

フランスのいなかば、どこもなく日本に似ていると思います。私は子どもたちと話しながら、ときどき日本に帰ったような氣持になることがありました。生まれた國をはなれて、外國に住むさび

しさは、ちょっと経験のない人にはわからないくらいのもです。しかしそのさびしさを、小さな友だちとのあたたかきまじわりが、どれほどなぐさめてくれたことでしょうか。住むところも遠くへだたり、話すことばも生活のしきたりもちがっている私たちが、へだてなくあたたかく心をかわすことができることはどありがたいことはありません。私はアンリ君たちのなつかしい思い出が、私の心の奥にとぼつて、いつまでも消えないとしびのような氣がするのです。

三郎君はそこまで読んできて、本をとじました。そして靜かにあおむけになりました。庭の八つ手の葉には、まだ強い夕日がいっぱいに照りつけています。せみの声が急にうるさく耳につきます。しかし、三郎君の心のうちには、なんとなくしつとりとあたたかい



フランスのいなか

ものがわきあがってくるのです。三郎君は目をつむって短かいため息をつきました。そのしみじみとしたなつかしいものは、おじさんのおもかげのようでもあり、また、いま読んだ人の心の奥にともるともしびといったもののようにも思われます。しかし三郎君にね、どこか遠い昔の思い出がよみがえってきたようにも思われるのでした。

その晩、三郎君はおじさんにお礼状を書いてしまうと、いつものように日記をつけました。日記には読んだ本の感想を書きました。本のなかには、お友だちをたいせつにしよう、というお話もありました。三郎君はそれを読んだ時、東京へ帰った信一さんのことを思いました。三郎君が日記をつけはじめたのも、もとはといえば、信一さんのおかげでした。その信一さんはいつも、「友だちはだいじなものだよ。」といっているのです。

信一さんは三郎君より六つも年上です。戦争中疎開してこられて、町の中学にかよっていられたのです。にいさんと同級で、しじゅう三郎君の家へ遊びにこられたのが、三郎君となかよしになるはじめでした。信一さんは弟がいないので、三郎君をかわいがつ

て、よく遊び相手になったり、散歩につれていってくれたりしました。ふたりでつばめのために住みよい巣をつくってやったこともあります。病氣の犬を世話してやったこともあります。三郎君は、信一さんがいっしょにいてくれたあの二年ぐらい楽しかったことはないように思います。その思い出は、三郎君の心のおくに、それこそいつまでも消えないあたたかいともしびのようにかがやいているのです。

三郎君から信一さんへ

信一さん。こんどの夏休みにはきつときてくださると思つて楽しみにしていたのに残念でした。急に肺炎をおこされたときは、みんなたいへんおどろきました。でもこのあいだ、にいさんからもうだいぶ元氣になられたというのをきいて、やつと安心しました。でもあとがだいじですから、どうか無理をしないでください。

ぼくは、ことしはたいそうおよげるようになりました。もうふたご岩までいって帰ってくるができます。まだ形はよくないのですが、クロールだつてできるようになりました。また波のりもずいぶんじょうずになりました。いっしょにおよいでいただけな

かったのが残念です。ことしはこむらがえりなんかおこすこともありませんでした。ぼくがいつも準備運動をやるので、組のなかまや、もつと小さい子まで、まねをするようになりました。ぼくのおしらせしたのは水泳のことばかりではありません。あまりたくさんあつて、どれから書いていいかわからないくらいです。

ぼくたちが五年生になつて、みんなで共同していろいろの研究をはじめたことは、もう前におしらせしました。今までのように、なんでも先生におききすればすむというわけにはいきませんし、むずかしいことにもぶつかりますが、みんなで心をあわせてがんばっています。とうとうやりとげたときのうれしさは、ちよつと口ではいえないくらいです。学習がこんなにおもしろいものだと、ぼくも今まで知りませんでした。

この夏休みの仕事のひとつとして、ぼくは乳牛を飼うことについてしらべました。信一さんが御存じのように、家では乳牛を飼っています。乳牛を飼うことがどんなにたくさんの人たちの役に立つか、またどんな人たちのお世話になつているか、というようなことをしらべて、家業の研究をしたわけです。こんどいらつしゃつたら、見ていただきたい

いと思っています。

ことしはずいぶん牛の草を刈りました。川ぶちの草も、山の草もとりにいきました。朝起きると、もうすぐにはいさんといつしよに草刈りです。朝露でびつしよりぬれますが、一時間もすると、どうやら朝の分だけとはれます。草をもつて帰ると、今度は町まで牛乳をもつていくのです。夕方涼しくなると、また草刈りです。牛は元気でよく乳を出しますが、草もずいぶんたべます。夕方の草刈りは、にいさんとこうたいすることもありません。その時は、ぼくが畑の草とりです。草とりもずいぶん早くまりましたよ。しかし、おとうさんとにいさんとぼくと三人がかりでも、田の草、畑の草にはなかなか追いつけないのはびつくりしました。時にはなにかうまい道具はないかしらと考えるくらいです。でもことしは、よその畑に負けるようなことはありませんでした。

さつまいもも、もうずいぶん大きくなりました。もう第一回の供出をしましたよ。東京で配給になりましたか。学校のごつごうがついたら、静養かたがたいらつしゃつて、さつまいもやお魚をたくさんめしあがつてはどうですか。ぼくの牛の乳ものんでみてく



ださい。にいさんやおとうさんもそう
 いつていられます。そしたら、いろい
 ろおもしろいことがあるんですが。
 もう一つおしらせすることがありま
 す。先月の二十二日に、新田の教夫さ
 んのお家でばやがありました。去年か
 ら教夫さんのお家の納屋に、満州から
 引きあげてきた準一君たちが住んで
 るのです。準一君たちは草とりに出
 いて、おかあさんと妹さんがお家に
 いたのですが、おかあさんが急に配給
 なにかの用で出かけられ、なかなか帰
 られないうちに、おなべをかけてあつ

た電気こんろから火が出たのだそうです。妹さんは家の近くに遊んでいたのですが、
 納屋から煙が出てくるまで気がつかなかったのです。

子どもたちがみんなで、「火事だよう」と叫んだので、教夫さんのお家の人や近所の
 畑にいた人がかけつけて消しました。さいわい教夫さんのお家では、貯水そうに水をは
 っておいたので、電気こんろのおいてあった台や、床や壁のほか、ふとんや着物を少し
 焼いただけですみましたが、とにかくあぶないことでした。

準一君のところはまさに不自由をするので、電気こんろを使ってとんだ失敗をしまし
 た。村の人たちのなかにはだいぶわるくいう人もありますが、せまい納屋に親子五人が
 住んでいるのですから、荷物は少ないといってもやはりらんざつになります。それにな
 にもかも間にあわせなので、無理ができるのもしかたがないところがあると思います。
 それより、準一君たちがいつそう困ることだろうと、お氣の毒でなりません。それに、
 そのぼやのあと、無理をなさったために、おかあさんはからだをわるくされているので
 す。ぼくたちは、みんなで準一君に元氣をつけることにしました。準一君に、「かれ枝拾

いにいくときは手つだつてあげるよ。」といったら、ほんとうにうれしそうでした。くに子さんたちの意見もあつて、学用品をあげたり勉強の手つだいもすることにしました。ぼくたちが、自分の学用品のなから少しずつ出しあつておみまいにいったとき、準一君のおかあさんは、やすんでいられたのを起きてこられて、涙をためてお礼をいわれました。ぼくたちもなんだか胸があつくなくて、ことばがつかえました。準一君はしょんぼりしてはくしそうでしたが、出てきてみんなにあいさつしました。

家で準一君のお家のようすをお話したら、おかあさんも涙ぐんでいていられました。おとうさんは、運のわるいときには失敗も起るのだ、だからそういうときのなんぎは、みんなで分けあつてあげるのがほんとうだとおっしゃいました。おかあさんは着物をもつておみまいにいかれたようです。

信一さん、ぼくはきょうも砂丘の上にすわつて、青い青い海の色を見ました。太陽がさらさらと水の上にかがやいています。空にはぼつかりとちぎれ雲がうかび、その雲に目がかげると、寄せてくる波のぼがはらはらとくずれるのが見えたりします。そんなと

き、ぼくは信一さんといっしょにすわっているような気がしてなりません。

こん学期から新聞係をやめて学級委員になつたので、このごろは二期の学級の仕事についていろいろ考えています。野球の試合や運動会のこともあるし、展覧会や学藝会のこともあるし、とり入れのころの手つだいの計画や、冬のしたくのこともあるし、信一さんがそばでいてくださればどんなにいいかと思っています。

信一さんから三郎君へ

ありがとう、三郎君。この夏おたずねできなかったことは、ぼくもたいへん残念に思っています。うつかりかぜをひいたのを無理してこじらせてしまい、みなさんに御心配をかけました。母は養生のためにも出かけてみたらといったのですが、半月以上もねて、すっかり予定をくるわしてしまいましたので、三郎君にはわるいと思ひながらやめたのです。冬休みにはぜひおじやましたいと思っています。

今までのお便りで知らせてくださった三郎君たちの活動は、どれもこれもすいぶんりっぱだと思います。とくに、この世の中が人々の助けあいでも成り立っている、というこ

との発見は、たいへんうれしく思いました。

三郎君は牛乳をのみにこいといつてくださるのですが、きみが毎朝町にもつていつてくれる牛乳が、ひよつとすると、ぼくがこのあいだ病氣のときにいただいた牛乳であるかもしれないね。なかなかそううまくいくはずはありませんが、三郎君が牛乳を集乳所へもつていつてくれなければ、東京へくる牛乳もそれだけ少なくなり、ぼくみたいな臨時の病人のところまで配給してもらえなかったかもしれない。三郎君はきっと、夏休みの研究で、きみのお家の牛乳がどこへはこばれていくかを知ったことと思います。しかし、結局どんな人が飲んだかまではわからなかったでしょう。

しかし、牛乳というもので、遠くはなれたふたりが結びついているのはなかなかおもしろいことです。ぼくは牛乳を飲んだとき、これがぼくの口にはいるためには、どんなにたくさんの方の手がかかっているかを考えてありがたいと思いました。三郎君のような人もいれば、消毒をしたり、都会へ運送したり、ぼくの家にとどけてくれたりする人もあります。もつと考えていくと、牛を育てたり、びんをつくったりした人もいます。

です。牛乳ばかりではありません。いま机にむかつて手紙を書いている自分のまわりをちよつと見てみただけでも、ぼくひとりでつくり出したものなど、一つだつてないといえます。そう考えてみると、私たちの生活は、非常にたくさんの方々の生活としっかり結びついているということができるでしょう。どの品物のうしろにも、それをつくり出したたくさんの方々がひしめきあっています。たとえてみると、私たちは、この社会の中で、ちょうど網の目のようになって生きているといえるではありませんか。

三郎君、私たちはまだそれほど世の中の役に立たないにしても、やはり網の目の一つであることにまちがいはありません。網の目は助けられるばかりでなく、また助けなければいけないのです。見ず知らずの人だからといって、知らない顔をすることはできませんね。汽車でのりあわせたり、道で会った人たちでも、やはりたどつてみれば、網の目の上からは親類なのですからね。

でも三郎君、私たちはこのような網の目でつながっているばかりでなく、また祖先と子孫という形でもつながっています。三郎君が生まれたのは、おとうさんとおかあさん

がいらっしゃったからです。そのおとうさんにはまたおとうさんとおかあさんがあり、おかあさんにもおとうさんとおかあさんがいられます。そういうふうな、ずっとたどつていくと、きみの祖先は、おどろくほどたくさんの人たちだということになるでしょう。しかもよく考えてみると、いつかこの世の中に生きていた祖先のひとりひとりが、やはり私たちの現在の生活にいろいろたいせつなつながりをもっているのです。乳牛のことを例にしていうと、よい乳をたくさん出す牛をつくり出すためには、ずいぶん長い年月と多数の人々の苦心とが必要です。ですから、現在牛を飼ったり、牛乳を都会へはこんだりしている人の働きほかに、そのように牛乳の改良ということに力をつくした人の働きもみのがしてはならないと思います。いろいろな進歩や発達は、結局、人間の共通の財産をふやしていくということです。そのために努力した人々に対しても、さきにつた網の目というものを、ひろげてあてはめてみることはできないでしょうか。そうして、みてはじめて、じつさいの社会の姿が考えられてくると思います。

一本の鉛筆をとりあげて考えてみても、このようにくみあわさった網の目ははつきり

わかると思います。どれだけたくさんの人たちの苦心や骨折りが、小さな鉛筆のなかにこめられていることでしょうか。それを考えれば、私たちはいつときもぼんやりすごしてしまうことができないと思います。私たちは、数知れないほどたくさん祖先がなしとげた仕事のつみ重ねの上に生活しています。私たちがそのような恩恵を受けているということには、またそれだけ重い責任があるのです。網の目はどこまでもどこまでもつながっています。またいつもわれわれが発端点に立っていることを忘れないでください。

この世の中が人々の助けあいだ、ということとはまちがいありません。しかし、そのことは、もういまのままでその助けあいが十分だというのではないでしょう。それだからこそ、私たちがおたがいに責任を重んじて、努力していくことが必要になるのです。もつともつと、あたたかい人間らしい助けあいがなくてはいけないと思います。それでは、人間らしい助けあいとはどういうことをいうのでしょうか。それはみんなが自分たちの助けあいということをよくよく考えて、だれにでも心からしんせつがつくせるようになることだと思います。近所の人たちはもちろん、他の地方の人や外国の人々ともよ

いお友だちになることだと思ひます。そのような世の中では、争いということも、貧乏ということも、きつとなくなつていくにちがひありません。

準一君とおかあさんはたいへんお氣の毒です。そういう人たちにとつていちばんありがたいのは、人の心のあたたかさということでしょう。三郎君たちの仕事はたいへん尊いと思ひます。準一君が早く元氣になるように、できるだけはげましてあげてください。決してあわれんであげるものではありません。そのような不幸にあわれた準一君に心から同情して、元氣に立ちあがつていただくために、よろこんで力になるのです。昔はお金持だからといつていばつたり、貧乏人だからといつてえんりよしたりした子もありました。どんなことでも、世の中のためになる仕事をまじめにつとめている人は尊いように、そまつな身なりをしていようと、りつばな子はりつばなのです。しかし私たちは、まだちつぽけな負けん氣やねたみにとらわれて、町のものがいなかの人をうらやんだり、いなかの人が町のものの不平をいつたり、同じ村の中できえいがみあうことがないとはいへません。でも私たちはいつも、あの大きな網の一つの目であることを忘れないで、

かたくかたく結びつき、大空のようにひろいあたたかい心を養つていきましよう。私たちの團結、それが新しい日本の姿です。

次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。

- 1、自分の學級の役員選舉はうまくいつているかどうか考えてみることに。
- 2、二學期の學級の仕事の計画を立てることに。
- 3、遠い所に住んでいる親類の人の表をつくることに。
- 4、外國の人たちの人情や風俗のことを、外國にいつていた人にきいてみることに。
- 5、外國人との交際のしかたについて考えてみることに。
- 6、疎開の人たちや引きあげの人たちが、どんなことに不自由をしているかしらべてみることに。
- 7、村で起りやすい火事の原因と予防法をしらべてみることに。
- 8、人と人とを心からむすびつけるのをさまたげる、さまざまの偏見やせまい心持をとりのぞく方法を考えることに。

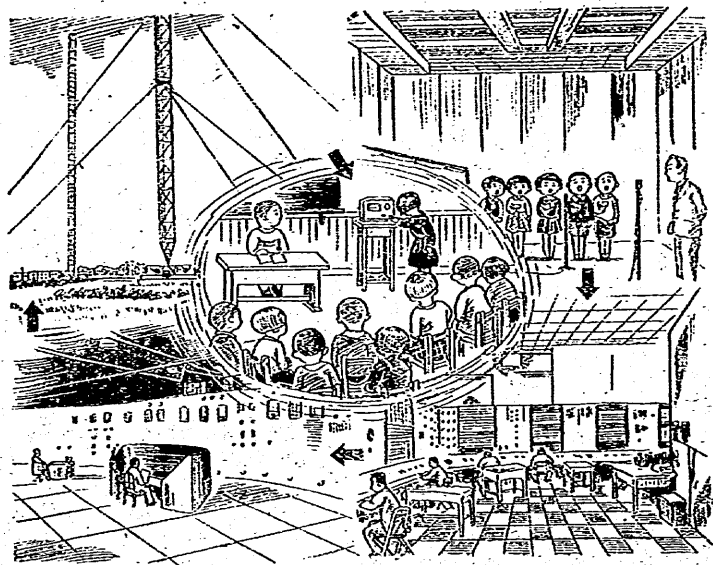
- 9、遠くにいる友だちに手紙を書くことに。
- 10、公共の機關をできるだけ多くあげ、そこではどんな人たちが働いているかしらべることに。

八、新聞やラジオのなかった時代

毎日雨がふりつづいて、またつゆがきたようです。三郎君は、けさ教室にはいると、おもしろいものをみつけました。教室のなかにマイクロフォンとラウドスピーカーがおりてあり、放送局の絵がかけてあつたのです。さきにきたものが、マイクロフォンの前で何かいうと、ラウドスピーカーがそれを大声につたえています。みな思い思いのことを放送してみているのです。

進君がにこにこして、こんどラジオのことを勉強するのだといっています。進君たちは、きのうの日曜日、学校にきて先生のお手つだいをしたそうです。

先生がおみえになつて、みんなで研究すること、やつてみるものがきまりました。そして仕事のわりあてについても話しあいました。放送する劇の脚本をつくる組も、ラジオのことをしらべる組も、マイクやスピーカーの取扱いかたをならう組も、放送局のことをしらべる組もできました。三郎君はすみ子さんといっしょに進君を手つだつて、新



聞やラジオのもっている働きと、そういうものがなかった時代に、そのかわりをしていたものについてしらべることにしました。

進君は前から郵便のことをしらべていたのですが、夏休みに新聞やラジオのことをいろいろ考えて、次のような表をつくっていました。そして昔のことをしらべようといひだしたのです。進君の考えは、むずかしいという人もありましたが、三郎君も、このあいだから、昔の人たちはどんな生活をしてたかということ

を考えてみたいと思つていたので、進君といつしよに研究することにしました。

ラジオのはたらき

- 1 世の中のできごとを人々に知らせる。
- 2 人々の意見をつたえる。
- 3 音楽や劇やスポーツの放送で人を楽しませる。
- 4 時事解説や英語講座などで、勉強させてくれる。
- 5 天気予報を知らせる。
- 6 時刻を知らせる。

新聞のはたらき

- 同じ、できごとの種類が多いが少しおそくなる。
同じ。
お話や小説、劇やスポーツの記事で人を楽しませる。
論説や学藝欄などで、いろいろな学問を教えてくれる。
同じ。
毎日の暦を知らせる。

三郎君とすみ子さんと進君の三人が、この表をラジオの番組や新聞の記事とあわせてしらべ、いろいろと話しかつてみた結果、もうひとつ大きな働きのあることに気がつきました。それは、ラジオでは、放送局や役所からのしらせ、ことに配給とか、人を求めることとかのしらせがあり、新聞には、そのほかに、会社や商店の広告がのせられてい

るということです。

それから三人は、現在このようにラジオや新聞の受けもっている仕事、昔はどんなものによつてはたされていたかをしらべていきました。めいめいで本を読んだり、雑誌を見たり、おとうさんやおかあさんから話をうかがつたりして、それを帳面に書きぬき、おたがいにくらべあわせ、まとめて学級の人たちに報告して、意見をきくことにしました。報告をする日はまだきまつていません。

次の文は、三人の研究を、進君がまとめたものです。

ラジオや電信電話・郵便・新聞などが、世の中のできごとを知らせる働きをはじめたのは、わが國ではまだ近ごろのことです。

ラジオ放送の開始 大正十四年（一九二五）

電信のはじまり 明治四年（一八七一）

電話のはじまり 明治十年（一八七七）

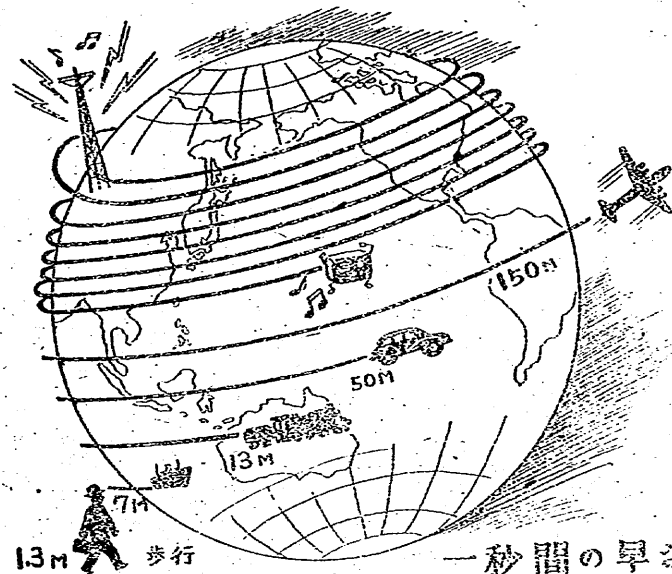
海底電線の敷設 明治八年（一八七五）

郵便制度の制定	明治四年（一八七二）
日刊新聞の発行	明治二年（一八六九）
鉄道の開通	明治五年（一八七二）
自動車の輸入	明治四十年（一九〇七）
航空郵便	昭和四年（一九二九）
旅客航空便	

だから江戸時代でも、はなれた土地の人にできごとをくわしく知らせるには、馬とかかごにのつて使いの者がかけつけるのがもつとも早い方法でした。今から二百四十年ばかり前、江戸をたつた早かごが、東海道を夜を日について走り、六六〇キロを少しの休みもなくリレー式に走り通して、播州赤穂^{はんしゅうしやく}についたのが四日のちだったといひます。それがそのころのレコードでした。手紙でしらせようとしても、その土地へ旅行する人がみつかるまで待つていなければなりませんでした。大名とか大きな商人とかは飛脚^{ていけつ}といふものを使ひましたが、これも人がもつていくのですからずいぶん日数がかかりました。昔は、いつばんの人はさう遠い土地のことを氣にしないですみました。だからあまり

手紙も書かず、用のあるときは、自分ででかけていつてすませていました。世の中の新しいできごとと耳づたえにきくほかに方法がなく、それだけでがまんしていたのです。耳から耳へとつたわつていくのですから、だんだん話が大げさになつたり、まちがつたりすることも少なくありませんでした。話は人のいききの盛んな宿場^{しゆくば}とか、町などにいちばん先につたわり、村の方へは、町から物賣りにきた商人や、村から町へ品物をはこんでいった人などを通してつたわつていきました。諸國^{しよこく}を行商^{ぎやう}してあるく薬屋^{くすりや}とか呉服屋^{こふくや}、小間物屋^{こまものや}などは、おもしろおかしくほかの土地のありさまを人にきかせて、それをあいきように商賣していったものです。

明治になつて交通や通信が急に發達したわけは、外國の進んだ方法を學んでとりいれたからです。しかしそのまたもとには、國じゆう世界じゆうが、昔にくらべてはるかに強く結びつけられてきたということがあります。昔は人がせまい土地にたてこもつて生活していました。江戸時代でも、農民は自分の土地をすてて他の土地に移ることがたやすくはできなかつたし、まして海外に出ていくことなどは思いもありませんでした。そ



一秒間の早さ

んなふうですから、國內の交通や通信の方法もあまり進歩をしませんし、まして外國との交通や通信などは、ほとんどなかったのです。それが明治からあとは、日本國じゅうが一つになり、昔のように藩と藩との間の強いしきりがなくなったので、關係の深い土地と土地とをむすびつける交通や通信が発達してきました。そして交通や通信が発達するにつれて、また土地と土地とがいよいよ密接な關係をもつようになりました。外國と日本との交通や通信も、これとまったく同じです。

交通や通信の発達ということを考えにいれると、土地の遠いとか近いとかいうことはかんたんにいえなくなります。たとえば、ここから山のかいこん地までは八〇キロしかありませんが、東京よりは郵便がくるのに日数がかかるし、使いを出しても三日がかりになつてしまいます。だからむしろ、東京の方がかいこん地より近いといつてもよいわけです。昔の日本の國は、ばらばらにわかれた、すみからすみまでたいそう日数のかかる廣い國でした。それが今では、一つのまとまつたせまい國になつてきたのです。これは他の國々でも同じことですし、世界ぜんたいについてもいえることです。昔は夢にも見なかったような遠い土地が、もうとなり近所になつてきました。アメリカで流行している音楽が、あつというまに日本のすみずみまでいきわたったり、日本に大地震があつたということが、もうその日のうちに世界じゅうに傳わつて、しんせつなおみまいを受けたりすることが起つてきました。

ラジオや新聞は、世の中のできごとをしらせるというだけではなく、國內の各地、あるいは世界の各地をむすびつける働きをしています。こういったものなかつた時代に

は、人々はみなその土地その土地にわかれて、別々の生活をしていたわけです。それは静かであつたかもしれませんが、せまい單調な生活であつたと思われれます。

次の文は、三人の研究を、すみ子さんがまとめたものです。

ラジオや新聞には、人々に楽しみをあたえてくれるという働きがあります。ラジオは音を通して、新聞は写真や絵や文字を通して、私たちに楽しみをあたえてくれます。

ラジオや新聞のなかつた時代にも、人々は音を通して、また絵や文字を通して楽しみを味わなかつたわけではありませんでした。ただそれは、その土地土地にかざられたものが多かつたようです。村では琴やしゃみせんをひける人もめつたにいませんでした。だから音による楽しみといえば、田うえ歌とか茶つみ歌などの民謡を歌つたりきいたりすることのほかには、お祭のときの笛とか太鼓があるくらいのものでした。音だけの楽しみではありませんが、しばいなども、村ではときに自分たちでやってみるくらいで、ごくまれに旅藝人でもまわつてきたときには、村じゅうの人が見にいつたそうです。ラ

ジオでしばいを見ることはできませんが、放送劇などをきいていると、なんだか目に見えるような氣さえして、つくづく便利になつたと思います。

新聞や雑誌がなかつたのですから、絵や文字を通しての楽しみは、絵草紙とか書物とかによつたのです。江戸時代になつてからは、木版の印刷が行われましたから、村のほうにも、少しはそういった本がはいつてきましたが、種類も部数もごく少なかつたので、ず。だからおもしろい話などは、人にきかせてもらつたり、人の集まつたときに話してつて楽しみました。同じ江戸時代でも、町に住んでいた人たちは、その点ではよほど楽しみが多かつたようです。琴やしゃみせんをひく人も多いし、うたいとか長うたとかいったものをうたう人も多く、寄席にいつてびわをきいたり、講談をきいたり、しばい小屋へいつてかぶきやおどりを楽しんだりすることもできました。絵草紙や書物も町では手に入れやすかつたようです。そのかわり、町の人たちのなかには、遊びにふけて家の人たちにめいわくをかけた人もありました。

村では、そういう楽しみは少なく、あつても單調でしたが、田や畑、あるいは海や山

の仕事のあいまいには、物日というのがあつて、その日は仕事を休んで、餅をついたり、料理をつくつたりして、おたがいによんだりよばれたりして楽しみました。そのうちでも、お正月とか、鎮守の祭とか、お盆とかは、いちばん楽しい時でした。村の人たちの楽しみには、きちんとしたきまりがあつたようです。このごろは、新聞やラジオのほかに、蓄音機もあり、映画もあつて、どれもみな村の生活にいきこんできたので、村の人たちの楽しみかたも少しづつかわつてきています。

次の文も、三人の研究を、三郎君がまとめたものです。

ラジオや新聞は、いろいろ役に立つことを、おとなにも子どもにも教えてくれます。それも、学校で教えてもらうのとは、少しようすがちがっています。おもに、その時々生活にすぐ役立つようなことで、順序立っていないのがふつうです。季節の草や木の手入れ法とか、季節の料理のしかたとか、時事問題の説明とか、みなそうです。

このようなことは、ラジオや新聞のない時代でもだいじなことでした。日々の生活に

すぐ役立つようなことがらは、おたがいの話しあいのうちに教えられていたものです。若いものどうし年よりどうし、ときには両方がいりまじつて話しあうよりあいの場合とか、仕事のあいまいのひとやすみのとき、夕涼みのとき、そういうときに教えあつたのです。物知りの年よりや、學問のある人、珍しい旅人などが話し手になります。こういうのを耳學問といっていました。

またラジオや新聞は、私たちの知識をひろくしてくれますが、昔の人たちは本をよんだり耳學問をするほかに、じっさいの社会のようすを見るために旅行に出かけていきました。職人などはほかの土地の親方の所へ出かけていきましたし、ふつうの農民や商人はお宮まいりとかお寺まいりといつて旅に出ては勉強をしました。高いけわしい山の上のお宮におまいりしてこないうちは一人前に取扱つてもらえないとか、一生のうち一度はお伊勢まいりをしなければいけないとか、かわいい子には旅をさせるとかいうこともその意味からいわれたのです。旅行は費用もかかるし、ひとりでは心細いので、講といふものをつくつて共同して費用をつみ立て、なかまが何人ずつかでないといふでかけ

たり、一同でいっしょにいたりしました。このふうは今でもだいぶ残っています。

今のような学校は明治になってからできたものです。江戸時代もなかばごろまでは、ふつうの子どもたちに、読み、書き、そろばんを教える寺子屋や、裁縫を教えるおししようにさんというようなものはありませんでした。だから、昔は、家の仕事を手つだったり、奉公にいたり、または旅に出たりして、じっさいについて学ぶのが勉強のおもなもので、それだけしかなかった人も多かつたようです。

三郎君たちは、このようにして、ラジオや新聞のほかの働きについてもしらべています。いまはラジオの時間を知らせる働きについて研究しています。ラジオの発達する前は、号砲（ドン）といつて、となり町で正午に空砲をうち、みなが時計をあわせていたということ、それよりも昔、江戸時代には、ふつうの家には時計がなく、お寺の鐘が時を知らせる働きをしていたこと、などがわかりました。また昔の時刻のよびかたもしらべました。ただ、お寺ではどんな方法で時刻を知ったのか、どんな時計を使ったのかは

はつきりしないので、なおしらべているところです。

廣告や天気予報についてもだいぶしらべることがありそうなので、三人は今までの研究についての話し合いを早くしてもらえるように、先生におねがいしようといっています。

次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょうか。

- 1、ラジオの番組や新聞の記事のひとつひとつについて、どんな働きをしているか考えてみることに。
- 2、自分の町や村の通信や交通の発達の歴史をしらべてみることに。
- 3、日本と他の國との交通や通信に必要な日数をしらべてみることに。
- 4、村の人々の樂しみを昔と今とくらべて表にしてみることに。
- 5、自分の住んでいる土地の物産を表にして、他の土地の人たちのつくった表とくらべてあわせてみることに。
- 6、正しい知識をえるのに役立つもの（ラジオ・新聞等）を書きならべ、その長短を考えることに。
- 7、書物の歴史、および書物のない時代の記録の方法についてしらべること。

- 8、昔の旅のありさまをしらべること。
- 9、いろいろな時刻の知りかたをしらべること。
- 10、いろいろな天気予報の方法をしらべること。

学校へいく路

冬になって氷がはると、

冬になって雪がふると、

学校へいく路は長くさびしい。

その路を生徒がいく。

だが、また、ゆかいな夏がきて、

鳥がなき、果実がみのり、花がされば、

学校へいく路は、なんて短かいのだろうか！

たのしい時間が、なんとはやく過ぎることか！

しかし、勉強がすきで、

ちえをえようとほげむ子には、

学校へいく路は、いつでも短い。

照る日も、雪の日も、また雨の日も。

どの子も、どの子も、心はけだかく、

何をするにも心をこめて、

いつ話すにも心やさしく、

すべての人のよろこびとなれ。

どんなところにいるときにでも。

(附)

教師及び父兄の方へ

一、第五学年の児童の生活には、次のような問題が横たわっていると考えられる。これらは、教師や父兄にとっては、児童に対するさまざまな期待や注文の根本になっているもので、児童に理解させ解決させたい問題である。また児童自身にとっては、日々の生活にいかわり立ちかわり現われてくる、さまざまな意図や疑問の源泉であつて、自分でははっきり意識していない場合もあるが、一絶えずその解決を求めている問題である。

問題

- (一) 私たちはどのように勉強すればよいか。
- (二) どうすれば、私たちは自分を安全にかつ健康にすることができるか。
- (三) 自分・家・学校・町村・國の財産にはどんなものがあり、どのように保護保全されているか。
- (四) 現代の産業はいかにして發達してきたか。
- (五) 發明発見はどのくらい私たちの生活を豊かにしたか。
- (六) どのようにして私たちは通信したり意見を交換したり旅行したりできるか。

(七) 外國人との交際はどのようにして行われるか。

(八) 國家統治にはどんな施設が必要か。

児童の種々な経験は、これらの問題を中心として、豊かになり、深くなつて行く。

二、この本は、児童たちに社会科学学習の手がかりを與え、その学習の進め方を暗示しようとして、若干の資料を提出している。しかしその資料は、第五学年の児童に、せひ與えなくてはならない知識を精選して排列したものではない。それは範圍からいっても、深さからいっても、たしかに偏している。だから従来の教科書のように考へてはいけない。むしろ、児童用の参考書の一種として取り扱っていただきたい。したがつて、この本に書いてあることを、順々に説明したり、暗記させたりしては困る。またこの教科書だけでは十分でもない。その意味でこの本を第六学年の児童が参考にしたリ、第六学年の本を第五学年の児童が借りてきて参考にするのもよいことである。

三、児童たちは、恐らく一息に、この本を読んでしまふであらう。そしてさまざまな疑問をもつたり、計画を立てたりするであらう。教師や父兄は、この児童の興味をうまく利用して、前にかかげた諸問題の解決に向け、自分たちの生活を向上する機会を與え、人間生活、社会

295-23
K160,3-1-5

私たちの生活 (一)
村の子ども 第五学年用
Approved by Ministry of Education
(Date Sept. 2, 1947)

昭和二十二年九月二日 翻刻印刷
昭和二十二年九月十五日 翻刻発行
〔昭和二十二年九月二日 文部省検査済〕

著作権所有 著作発行者 文 部 省

印刷所 東京都文京区久堅町一〇八番地
印刷所 日本書籍株式会社
印刷所 東京都文京区久堅町一〇八番地
印刷所 日本書籍株式会社
印刷所 日本書籍株式会社

66548

生活の理解を深めるように、取り計らっていただきたい。

四、各章の終りに示した、児童の考えること、実行することは、児童自身の抱いた疑問や計画とともに、教師の計画した学習活動に、児童を導入するきっかけとして利用することができらるであらう。そのためには、教師は必要に応じて、この本の適当な部分を指示して児童に精読させたり、その読後感を求めたりすることも、よいと思われる。

五、この本は、農山漁村の生活に取材しているが、都市の児童もまたそこに、自分たちと関係のある多くの問題を発見することができるであらう。

